

わたしとき 面接の手順

岡田 隆介

児童精神科医

1. 面接の入り口 ジョイニング

わたしは、広島市こども療育センターというところで子どもの精神科診療をしています。わたしの外来でもっとも多い相談は「障害」に関するものです。なかでも、発達障害に関連する相談は増加の一途をたどっています。以前は「学校不適應」やそれに関連した「いじめ」「乱暴」「ひきこもり」が中心だったのですが、最近はかなり減っています。初診・再診の予約が1～2ヶ月先になる精神科より、教育相談のほうが身近で充実しているせいではないかと思えます。このほか、児童相談所と連携して行う虐待関連相談・児童養護施設支援もあります。

こうしたなかで、どのような相談であっても援助を求めている人（以下、クライアント）は“不安・戸惑い”と“怒り・憤り”と“これまでの解決努力”と“相談ごとの自分なりの解釈（自説）”を抱えて来談することに気付かされます。通常、この四つ組の主役は不安・戸惑いです。「この先、どうなるのだろう」といった先行きの不安だけでなく、担当者や相談のすすめ方への不安も大きいでしょう。

DV・虐待・非行・いじめ被害等では、「どうして自分がこんな目にあわなければならないのか」「○○のせいでこんなことになった」という怒り・憤りが

主役になることもあります。ですがよく聴いてみると、“怒り・憤り”も根っこ部分では“不安・戸惑い”とつながっており、表現の仕方が違うだけかもしれません。

四つ組の残る二つ、解決努力と自説もしっかりくっついていきます。ほぼ例外なく、クライアントは援助を求めるまでに自分なりの解決努力を重ねていますが、それは自説をもとに組み立てられたものです。現在の無効な解決努力を効果的な別の策に変えようとして助言や指導をしても、すんなりと応じてもらえないのはそのせいです。解決努力は自説とセットで考えることを忘れてはいけません。

というわけで、クライアントの自説を聞かせてもらうことが重要な作業になります。ほとんどのクライアントは、援助者が自分の説に同意しそれに沿った解決策を示してくれるものと信じ、一刻も早く自説を聞いてほしいと願っています。ですが、クライアントの期待通りに自説を受け入れては新しい解決策につながっていきません（自説と解決努力はセットですから）。「新しい酒は新しい皮袋に」ということになりますが、自説はクライアントの拠り所ですからそう簡単に手放すことはできません。そんなわけで、クライアントの説明の聴き方と扱いが対人援助のキモとなります。

そのために、まず援助者はクライアントの不安・戸惑い、怒り・憤りをしっかり受け止めなければな

りません。その上で、解決努力をきちんとねぎらいます。ジョイニングです。そうすることではじめて、過去から続く痛みをいまの苦しみに繋げた自説を「額縁（枠）に入れた絵物語」のように語ってくれます。その際、絵だけでなくそれを成立させている枠を見逃さないことが重要です。この枠は絵を引き立てるためのものではなく、そこに絵のテーマ（クライアントの生きる枠）が表わされているからです。

2．身体の相談の場合

四つ組みは、身体の相談でも同じです。たとえば、全身倦怠感がひどくて受診する場合、「入院を要するような病気だったらどうしよう」という不安・戸惑いと、「ずっと忙しくて過労気味だったせいに違いない」という自説と「ストレス解消、栄養摂取に気を配った」とする解決努力があるでしょう。

普通はうまく抑え込んでいますが、「よりによってどうしてこの時期に自分が」の怒り・憤りもあるはずです。患者さんはきっと「ずっと仕事が忙しく、無理をし続けたために疲労が蓄積し、ついに体調を崩すに至った」という絵を描き、その周囲には「会社も家庭も、自分が頑張らないとダメになる」という枠を持っているでしょう。それは、彼の体調のみならず生き方をも縛っている枠組みのほうです。

医師は患者さんの話をひと通り聞いた後に、必要な検査を実施して診断を告げます。このとき、患者さんの自説と医師による「肝機能障害」という診断は一致しませんが、医師は「ただの疲れ」説をきっぱり否定します。自説を置き換えられた患者さんも、抵抗することなく受け入れるでしょう。それは科学的根拠を持つ専門家の見解だからです。医学援助モデルでは、サービスを提供する側と受ける側との間に実に潔い線が引かれています。

ただあえて言えば、「自分がいなければ～」の枠は基本的に手つかずです。もしも再発するとしたら、このあたりが問題になるかもしれません。

3．心の相談の場合

近隣住民からの通報で始まる虐待相談を例に考えてみましょう。この場合、主役は怒りです。家族はまず通告者への憤りを、ついで当の子どもへの怒りを表わします。それにていねいに耳を傾けていると、やがて暮らしむきの不安や子育ての混乱等を少しずつ口にしします。怒りの受け止め・不安の受け入れ・解決努力のねぎらいをしっかりと行うことで、やっとクライアントの絵物語を聞くことができます。

よくあるのは「子どもの問題を解決するために手をあげた。学校や福祉があてにできないから、自分たちがこうやって努力している。それを責めるとはどうか。これは躰であり、親の義務である。殴るのは言うことを聞かないからであり、自分だってそうやって育てられてきた」という絵です。自説が解決努力を支え、結果的に虐待が持続するという構造になっています。

専門機関は「親自身の被虐待体験がその性格形成に影を落とし、虐待行為に結びついている」とか、「社会的な孤立や経済的な脆弱さが育児の混乱をより大きくしている」みたいな解釈をしますが、医学モデルと違ってその絵に家族を納得させて新たな対応へと導く力はさほど強くありません。ときには援助の手が同時に追及の手でもあったりして、両者の絵と枠組みは真っ向からぶつかります。心の領域では、専門性と当事者性は基本的に対等のように思われます。

では、心の相談における専門性とはいったい何でしょう。わたしは、「言葉を介して相互に影響し合う関係のなかで、新しいものを生み出せること」だと思っています。まさに、科学的に証明できないという心の領域の弱みを強みに変えられる専門性です。ここでは、絵物語や枠組みを動かすのは科学ではなく言葉（による相互作用）なのです。

4．手立て

～クライアントの絵物語とその枠～

家族システムと同様に、援助の場にもシステムはあります。援助面接は、絵物語と枠をはさんだクライアントと援助者の相互作用によって展開します。クライアントと援助者がどのような語りをするか、

それによって援助の道筋は次のように分かります。

① 「〇〇が問題」とするクライアントの絵を援助者の枠で「△△が問題」とし、具体的に明日を語ってみせる。

ジョイニングがじゅうぶんになされた後、『わたしは、〇〇でなく××が問題だと思います』『ちょっと待って！それ、どういうこと？』というやりとりをします。この場合、援助者の『なぜなら～』以降がクライアントの腑に落ちなければ、相談が途切れることになりかねません。

これはクライアントの予想を超えた展開で、当然、緊張が高まります。とはいえ、問題と指摘した××がクライアントの興味や好奇心を呼び起こせば、高まっていた緊張は弛緩していきます。

「産まなきゃよかった。怒ったらいつも黙ってうつむくだけで、返事もしない。それで手が出てしまう。別の時に聞いただと、どうせ自分は要らない子だからとしか言わない。ほんと、憎たらしい。あの子は、生まれながら性格がゆがんでいる」

『そうでしたか、性格のせいだとずっと悩んでおられたのですか。性格が原因なら、根深い気がしますものね。でもね、こんなことを言ってもすぐには納得していただけないかもしれませんが、問題は彼の性格ではないと思います。いやもちろん、子育ての責任でもありません。これは心理テストにもでているのですが、実は彼の情報の受け方、処理の仕方は独特なんです。

たとえばね、先日のことは「いい加減にしないよ」から始まったじゃないですか。でも彼はね、この“いい加減”という意味がわからない。何をどうしてほしい、そう具体的に言われないとわからないんです。普通なら、意味はわからなくても雰囲気や察知しますよね。ところが、いわゆる空気なるものを読む力も弱いんです。

というのはね、一つのことに注意が向くとそれ以外が自動的に遮断されるんです。お母さんの「いい加減にしないよ」に意識が向くと、表情や空気や伝わるべきものが遮断されてしまうんでしょう。それで結局、場にそぐわない態度をとってしまうんです。

TVゲームしてる時もこの遮断が起きるから、お母さんの言葉を完全に無視し、叩かれて始めて気付くなんてことが起きます。

それから、言葉で言われたことを頭の中でムービーのように映像化して理解することが苦手です。それで先のイメージが持てず、言われていることの全体像が理解できません。ちょっと考えたらわかりそうな結末さえも予測できず、お母さんから見たらわざととしか思えないようなミスをやってしまうわけです。

また体の感覚も独特で、先日トイレを失敗して、叱られる前にパニックになったでしょ。あれは、自分の尿の生暖かさに耐えられなかったのだと考えられます。不思議でしょう？

さぞかし、たいへんな子育てだったことしょうね。戸惑いの連続だったに違いないと思います。ですが、彼にとっても世の中の仕組みはわかりにくいものなんです。実は、こういった特徴を前提とした子育てのコツを集めたものがあるのですが、いっしょに試してみませんか』

母親の絵の根底にあるのは、「この子が問題」です。また母親は、親や姉妹、つきあっている男性、前夫、近隣との薄い関係の中で安心・安全を感じて生きてきました。つまり、それが母親の枠組みです。ところが、子育てはそんな距離ではできません。それでもがき苦しんでいる、わたしはそう読み取りました。

この絵物語を「子ども（の性格）が問題」というベースで突き進むのは、正直キツイです。そこで子どもに備わっている「特質」に注目し、専門家然としてこちらの枠を持ち込みました。子どもに生まれながら発達障害的な特徴があったのか、あるいは虐待環境の中で発達に偏りが生まれたのか、それはわからないし、いまはどちらでもいいです。ねらいは、他人の援助を必要とする問題によって、家族の相互作用が変わることにあります。

この枠が母親の腑に落ちれば、新しい子育てに関連した心理教育的なプログラムに誘います。この手順を飛ばしてプログラムに誘っても、「〇〇が問題」が変わらなければ思うような成果は上がりません。

② 既にある強み・マシ・違いを繋ぐように質問を重ねるところから、クライアント自身が明日を描く

社会への不信・不安が根深く、通報者や近隣住民への怒りが自身の困りごとを凌駕している場合、①のように“教える・変える”を軸にした相互作用は生まれにくいです。そこで、逆の“尋ねる・教わる”をやりとりの基本にします。これは中断しにくい対等の関係に近づくことを意味しており、力の上下関係を生きてきたクライアントには未知のコミュニケーションになるかもしれません。

クライアントの絵物語は、自分史に散らばる不運、不幸、許し難い他人、無力な自分などネガティブな点を強調しながら繋いでいます。その選択基準は、まさにクライアントの枠組みです。援助者は、クライアントの絵・枠をじっとながめます。そして数多くの過去の情報から、クライアントの枠から外れて意味を与えられずに見逃された点（エピソード）やクライアントの語りからすれば例外として無視されてきた点に興味をよめます。またいま起きていることの中で、いつもよりいくぶんマシに見える点やこれまでとは少し違って聞こえる点にも注意を向けます。こうした基準をもって集めた情報について、どうしてそんなことができたのか等、それらの間に脈絡が生まれるような質問をするわけです。

クライアント自身がそれらの点に意味を与え、自分の絵物語の中にはめ込んでいくと、「○○が問題である」から「なんとか対処できている」へと移っていきます。

たとえば、
「相変わらずですよ。忙しいときに、わざわざ怒らせることをやるものだから手が出てしまう」

『掃除機の柄でボコボコですか・・・』

「いやグーパンチだったけど」

『柄を使わなかったのは、何かわけがあったのですか。それに蹴りも控えられたんですよね』

『たまたま近くになかったから。蹴りは言われてみるまで気がつかなかった』

「その日は、わざわざ柄を探そうとはしなかったし、足も出なかった。いったい何が違っていたのでしょうか？」

『そんなこと、別に。めんどくさかったからかな』

「いや、それってすごいことじゃないですか。よく子どもの面倒をみるっていうでしょ、つまり子育ては面倒なものなんです。これまで、なんでもかんでもご自分でひっかぶっていたお母さんが、面倒だと思われるなんてすごく大きな変化だと思いますけど」

『そお？面倒っていいこと？』

「そう思います。面倒だと少し距離を置くでしょ。そうなれば、余裕ができて（＝母親が得意とする距離）子どものことが見えてくると思います。面倒こそが、楽な子育ての入り口じゃないでしょうか。そんな気持ちになられていたなんて、実に驚きました。それって意識的に工夫されたことですか。それとも心境の変化ですか」

『別に、思い当たることはないけど』

「じゃあ、今後、カチンとくる場面にぶちあたったら、なんでここで掃除機の柄を探さないんだろとか、なんでしかり飛ばすことが面倒なんだろって、その場で観察してもらえませんか？それこそ面倒かもしれないけど、ぜひ教わりたいんです」

『はあ、まあやってみるけど。なんか、先生の言うことを真に受けたら、このままでいいかもって思ってしまう』

「ほんとですか、実はわたしも、最近、同じことを思ってるんですよ」

『もうひとつ、先生。あの子のこだわりはなんとなるもの？気に入ると手放さないし、気に入らなければ受け付けない、もうあきらめるほど頑固で』

「はい。でも、そのこだわりは反抗とは別物で、わがままとも違うんですよ。それは、子どもさん自身もどうにもできないものなんです。当面、こだわりは指導の対象にしないことにしましょう、危ないことでない限り。将来的には、むしろそのこだわりを生かす方向を考えればいいと思います」

5 . 二つの道筋

①の「クライアントが○○を問題と語る枠組みを、援助者が別の枠組みで△△が問題と語る」は、援助者のデザインにそった心理教育的な変える面接と言えます。

一方、②の「クライアントの絵物語や枠組のなかに、既にある強み、マシ、違いを援助者の文脈で語る」は、解決志向的な変わる面接です。そこだけを見ると対照的といえるでしょうが、①で援助者が代わりの枠を持ち出したのも②でクライアントのなかに既に特別な点があることに気付くのも、面接の場でのやりとりから生まれたものです。

また援助者は、①で示した「××」が被虐待に直結していると確信していたのではないし、②でとりあげたマシや違いに本当に意味があると自信を持って言い切ったのでもありません。援助者の思いつきに過ぎなくても、クライアントの腑に落ちるところから大きな意味と価値を持つといった相互作用も、両方に共通する重要な点です。

ここで、クライアントの腑に落ちやすさについて考えてみましょう。①で援助者から「〇〇が問題」を否定されたとき、クライアントの緊張は高まります。ところが、「実は××が・・・」に惹かれると緊張は一気に弛緩します。そこに生まれる落差が大きいほど、“腑落ち”につながりやすい気がします。

②のクライアントには、「どうして自分が変わらなければならないのか」という意地があり、自分が責められるに違いないとかまえています。そこに「変える必要はありません、もう既に変わっています」だから、予想とは大きな落差があったことでしょう。システムはこうした落差からエネルギーを生み出すと考えることも可能ではないでしょうか。

また、「なんとかできるかもしれない」と変化の可能性を感じてもらうことも腑に落ちる上では重要です。展望が開けて希望がわいてくるには、そこに具体性が含まれていなければなりません。①の心理教育的なプラン、②の既にあるという点がそれにあたるでしょう。

7. おわりに

「こうならないかなあ」は夢であり、「こうなりたい」は願望です。そんなものでは、変化をもたらすには力不足です。それに対し、「そうなるかもしれない」は近未来像です。これまでお話ししてきた①の道筋は、それを目指すものでした。さらに、「既に、

そうなれてるのかも」は現在の手応えです。②の道筋は、まさにそれを意味しています。

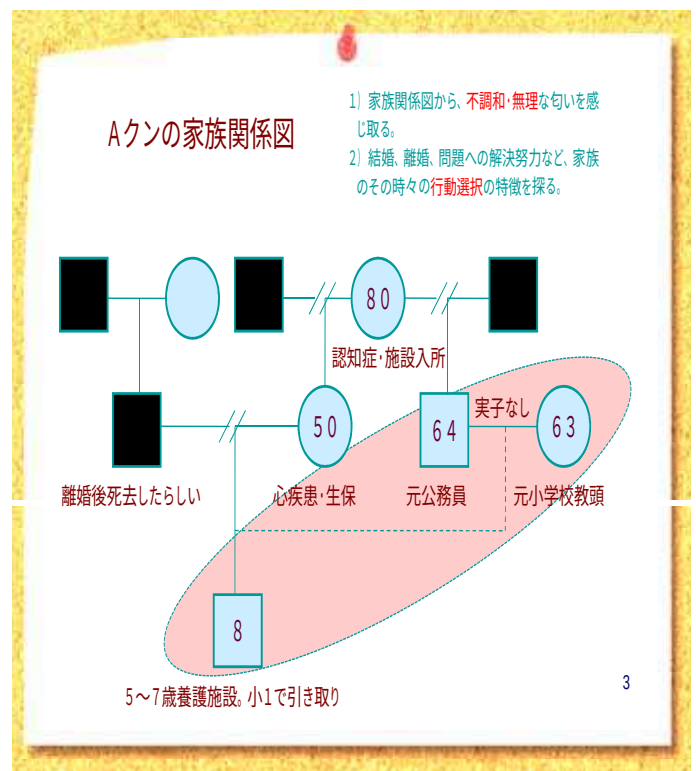
わたしは、対人援助とはクライアントが具体的な希望や手応えを持つための援助だと考えています。なぜなら、そこから生まれるパワーほど力強く生きる枠組みを変えたり、絵物語を書き換えるものはないと信じるからです。

ケース カンファレンス

*プライバシー保護のため、症例には大幅に手を入れて創っています。

(A) 家族関係図から

- 1) 家族関係図から、不調和・無理な匂いを感じ取る。
- 2) 結婚、離婚、問題への解決努力など、家族のその時々への行動選択の特徴を探る。



(B) 家族のストーリーから そこに潜む強みを見つける

1) 変化や解決以前に、まずクライアントをエンパワー（「来てよかった」「聴いてもらってよかった」「気分が楽になった」）。

2) そのために、家族の語りから家族の強み（リソース、既に起きてる変化等）にこだわる。

3) そこから、クライアント自身、クライアントの過去・家族、世間に対する肯定感をベースにした相互性が生まれる。

※ クライアントが訴える表の主訴以外に裏の主訴があるかもしれないことを念頭に。

1. 概要

児相に紹介されてやってきたのは、現在A男を養育している叔父夫婦だった。一緒に住むようになって半年たったが、「偏食が激しく、嫌いなものを机の下やカーペットの下に隠す」、「腹が立つと、衣類をハサミで切り刻む」、「夕食を残し、夜、冷蔵庫の残り物を漁る」、「家にあるものが気に入ったら平気で盗る」、「目を離すとすぐ店のものを盗り、叱っても平気な顔をしている」、「近所の声をかけてくれる人に、異様に馴れ馴れしくする」、「小動物いじめをする」、「相手に無関係に、一方的にしゃべり続ける」、「叱られているときに、ニヤッと笑う」、「注意されたことをすぐ繰り返す」等で困っているという相談であった。

叔父夫婦は、父親に殴られ母親に見捨てられ、施設で十分な躰をされていないA男に、責任をもって躰をしようとしてきた。にもかかわらずA男の行動はますますひどくなっており、これをどのように理解したらいいかを知りたいということであった。

叔母は、夫の異父妹の気の毒な子どもということで、5歳の頃から施設からの外泊を引き受けていたのだが、当時から子どもらしい生き生きした感情表現が少なく、なにかを共感しあうことが難しかったと振り返る。

A男は横で話を聞きながら、叔父叔母から確認を求められるたびに黙ってうなずいていた。問うと叔父夫婦のことが大好きと答え、無邪気にずっとこの家で暮らしたいと言う。ここでの話が自分の行く末に関わっていることはまったく理解できていないようで、それがまた叔父夫婦を困惑させていた。

学校からの情報では、A男が父親からの暴力や母親に見捨てられたことをよく口にする、特別支

援教育の対象で校内では特に問題がないことがわかった。

2. A男の生育史

実母は心臓が弱く、高校卒業後一人で生活していたが、40歳を過ぎて同じ高校の同級生だった実父と出会い、同棲し、妊娠して結婚。42歳の時にA男を生んだ。実父はアルコール依存のうえ就労が不安定で、結婚当初よりDVがあった。A男は乳児期から罵声を浴び、幼児期には身体的暴力を受けていた。やがて、毎日のように母子に暴力をふるうようになったため、母親は5歳のA男を連れて家を出た。友人宅に身を寄せたものの、その翌日、母親は何も言わず行方をくらませた。

その友人から連絡を受け、児相はA男を保護した。母親とは連絡が取れず、父親の同意によりA男は児童養護施設に措置された（後に離婚し、親権者は母親となる）。施設では、他児の食べ物を勝手に食べたり自分の持ち物以外でも無断で使うということが頻発した。注意されると逆ギレしパニック状態になるということで、施設は処遇に困っていた。

入所して2年たち少し落ち着いてきた頃、それまで面会や外泊をしていた実母の異父兄夫婦が実母を伴って児相を訪れ、A男を引き取りたいと申し出た。児相は状況を調査し、措置を解除した。

なお本児は、知的には境界域で学力は低かった。

（C）面接の指針

児童相談所の紹介で、叔父夫婦がA男といっしょにやってきた。退職後は農業をしており、実子はいない。将来的にはA男と養子縁組をして跡継ぎにするつもりで、実母も了解しているとのことであった。

叔父は、A男の行動を理解したい、それがわからないと心も通じないと訴える。叔母は、虐待を受けて育ったり施設で大きくなったりしたことが原因なのか、躰不足だと思って厳しく接してきたことが間違いだったのかと尋ねる。そしてA男に、「わざとおじさんたちを困らせよう、怒らせようとしているのか？」と問いたす。A男は、意味がわからないといった表情で反応しない。

叔父夫婦の仮説は、「A男と心が通じ合っていないのは、虐待生活や施設生活による躰不足とA男を十

分に理解できていないことが原因だ」であった。この仮説の根幹をなしているのは、A男の行動が「わざと」という受け止めである。この「わざと」を否定すると、理解に到達することは困難になると感じた。そこで、わざとをメタファーでくるで言い換えてみた。

T h「唐突な質問なんですけど、お風呂にどんな入り方をされますか？ボクは胸の辺りまで少しぬるめのお湯を張って、ゆったり入るのが好きなんですけど」
叔母「同じですね、わたしたち、血圧が高いと言われているので・・・」

T h「近頃は、だいたいみなさん、そうされますね。それが一番気持ちいいですものね。ところが、みんなそうかと言ったらそんなことはありません。たとえば、A男くんなんか、全然違います」

叔母「え？A男の入浴をご存じなんですか？」

T h「いえ、すみません。普段の生活をお風呂にたとえた話なんですけど、A男くんは“わざわざ熱いお湯、または思いっきり冷たい水を、口のすぐ下まで張って入っている”じゃないかと思われるのです。われわれ流の風呂なんて、ぬるくて何も感じないんじゃないでしょうか。熱過ぎたり冷た過ぎる刺激、呼吸が苦しくなるほどの圧迫感、それが無いと入った気がしないわけですよ、言ってみれば。つまり、彼は風呂に緊張の緩和ではなく緊張の高まりを求めているのじゃないかと」

叔父「それは、生活の刺激ってことですか？」

T h「その通りです。彼は、わざとお風呂に服を着たままで入ってる。いや、鎧と言った方がいいかな。ですから、強烈な熱さや冷たさでも肌に達する頃にはちょうどいいぬるさになってるのでしょうね」

叔母「虐待を受けたら、鎧でもまとわないととても耐えられなかったでしょうね」

T h「おっしゃるとおりです。鎧のおかげで家でも施設でも生きてこれたんでしょう。そしてそれを、まだ手放せないわけです。いまでも脱いでませんよね。日々の注意・叱責・トラブルは、言ってみれば熱湯であり氷水なわけです。それを、わざわざ口の高さまで満たしている」

叔父「つまり、わざと叱られることをするのは、そういう刺激しか心に到達しないから、ですか??」

T h「わたしにはそう見えるんです。どうしたらわ

ざとアップアップするまでお湯をはるようなことをしなくなるかが問題なのではなく、どうやったら鎧を脱いで生きていくか、それがポイントではないでしょうか。いや、でも、ほんとにいまも常に鎧を着ているのかなあ。もしかしたら、そっと脱いでいる時間もあるのかもしれない。いかがです？」

叔父「それは、ぬるいお湯を味わっているときがあるはずだと言う意味ですか？」

T h「そうですね。目立たないかもしれないけど、日々の何気ない普通の出来事を味わっている瞬間、ないですかね？」

叔母「何気ない普通ですか・・・」

T h「ええ、一人でなにげなく過ごしているときとか・・・」

叔父「熱湯ばかり見ていたので、そんなこと思いもしませんでした。探してみます」

・・・・・・・・・・

T h「子どもらしい生き生きとした感情が感じられない、とおっしゃってましたよね？」

叔母「そうなんです。ほめられても怒られても、なんか淡々としているんですよ。子どもらしくないというか。ほら、いまもそんな感じでしょ」

T h「歓びと悦び、哀しみと悲しみ、怒りと憤り、楽しさと愉しみ、照れと恥じらい、誇りと自慢、こんなものを表現しきるには24色の色鉛筆でも足りないかもしれないですよ。でも彼の幼児期の生活は、恐怖と怒りが“有るか無いか”の世界でしたでしょうから、白黒2色しか使わなかったんじゃないでしょうか。“生き生きとした色彩”なんて意味がわからないでしょ」

叔母「必要なかったということですか・・・」

T h「さきほど淡々としているとおっしゃいましたが、それは白黒以外の色使いじゃないですか。淡い水色くらいかな。少なくとも水墨画のような枯れた世界とは違いますよね」

叔母「なるほど、じゃあ、私に叱られて黙ってうつむいているときなんかは赤ですか？」

T h「たしかに。じゃあ、ぬるいお湯につかっているときなんかは、何色でしょう？」

・・・・・・・・・・

叔母「この先、叱ってはいけない。そういうことなんでしょうか？」

T h 「いいえ、ちょっと違います。保護者として譲れない線というのは、やっぱりあると思います。その線引きを考えてみましょう。法律違反と自分や他人を傷けること、これは絶対に譲れませんね、線の内側です」

叔父「ええ、そうですね」

T h 「次に不適切な行為、たとえばマナー違反とか常識に反する行いですが、これは微妙です。わたしとしては、これは線の外側に置けないかと」

叔父「でも、わたしらはそれが見逃せなくて・・・」

T h 「いえ、見逃すのではなく、逆に見てあげないのです。熱湯や氷水を口の高さまでではという話をしましたよね、わざわざそんなことをするのは、基本的に見せる、見てもらうための行為で、気づいてもらって初めて両者の間に緊張が高まるわけです。それを見てあげないのは、不適切な行動を認めたことにはならないし、彼の作戦にのったことにもなりません」

叔父「わざとのし甲斐がないということですか。仮に見ないようにしたらどうなりますか？」

T h 「とりあえず、もっとがんばって見せようとするでしょうね。でもね、他の場面を見ていたら、“何だ、そういうことか”と。つまり、わざわざお湯をいっぱいにしなくても、胸の高さのぬるめのお湯を見ってくれるのなら、それでじゅうぶんじゃないかと。つまり、日々の何気ない普通の出来事でやりとりをするわけです。緊張感のある生活よりも緩い生活で付き合っていくってことなんです」

叔父「さっき言われた不適切な行為というのが、あの子の風呂の入り方だということですか」

T h 「はい。まさにその通りです」

・・・・・・・・・・

叔父「私らは、何をめざして育てればいいのでしょうか？」

T h 「私は、A男くんがこの家にいて、自分がどれほど役に立っているか、自分がどのくらい当てにされているか、を実感できるということだと思います。彼が生家や施設で手にすることができなかったのは、まさにこれだと思うんですね。信頼感とか安全感は、こうした貢献感を手にすることから生まれると思います」

面接は、A男の理解、生き生きとした感情交流、今後の目標に関する家族の疑問に答えてほしいという流れである。だが、求められるまま家族の考えに上書きしても、おそらくそれは受け入れてもらえない。そこで、援助者のメタファーでくるんだ答えを提供した。そうすると、あとは心理教育的にこちらのペースで面接は運ばれていった。

ケースのツボとそこに 合わさる言葉（1）

岡田 隆介

児童精神科医

1. ケースのツボ

誰でもそうだと思いますが、私も面接のとき、そこでしか感じられないコンテキストをとらえようと視聴覚の感度をギリギリまで高めます。また事例検討会の席では、記録と行間からケースのリアリティを感じようとピリピリするほど皮膚感覚をとぎすまします。そうやってケースの全体像を把握しようとしています。

全体が見えてケースの中核をとらえた気になると、「よし、分かった」とひとまず安堵するのですが、少し立つとそれが揺れだします。どう言えいいのでしょうか、全体がみえて部分がかすんでいくような感じ、ケースが見えてポイントがわからなくなる不安、そんなものが襲ってくるのです。

ここで言うポイントとは、臨床の感どころのことです（勘所ではありません、念のため）。わたしはツボと呼んでいます、いずれにしても、さほど理屈のあるものではありません。これは目とか耳、あるいは肌でわかるものではないと思います。ツボを嗅ぎ分けるわけですから、嗅覚的なものでしょう。

ここがツボだと思ったら、その近辺を押さえます。すると、ちょっとした言葉とかメタファーが浮かびます。たいした根拠もなく浮かんでくるものですから、自分でも意味がわからないということがあります。

もちろん、ツボは必ず嗅ぎあてられるものではなく、結局わからず終いということも多いです。わた

しは、面接場面とは真反対の状態、つまり意識レベルがやや低目のときにツボに近づけると信じています。

何かが浮かんだらすぐ口にしたほうがいいでしょう。イメージがはっきりつながるまで暖めればいいのですが、そんなことをしていると消えてしまいます。そんなわけで、口にした後で「オレ、なにを言ってるんだろ？」ってことにもなります。

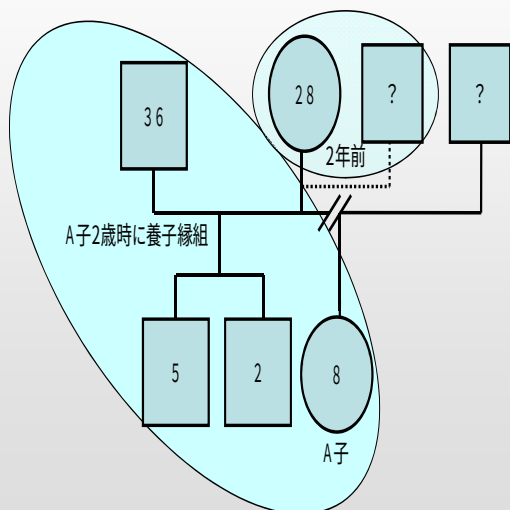
ツボから出た言葉は相手の腑に落ちやすい、これはあると思います。面接に来ている家族とか会議の参加者に伝えると、瞬間、場の空気が替わります。もちろん、だからといってそれで問題が解決するわけではありません。しかし、面接や会議の流れでとても重要な分岐点になることは間違いありません。

ケースの全体像を学ぶワークショップとか、中核部分を押さえてくれるスーパービジョンというのはよくあります。でも、ケースのツボを探る方法なんて聞いたことがないでしょう。実際のところ、ボーと報告を聞いたりケースを読む以外にこれといっていい方法はないわけですが。

ツボに臨床的な意味があるのか、やってみる価値があるのか、正直、よく分りません。そんな怪しげな話ですが、このマガジンだと読んでもらえそうな気がするので、例をあげて説明したいと思います。

なお症例は、プライバシー保護のため大きく創作を加えて事実からは遠いものになっていることをお断りしておきます。

(1) 家族関係図



A子は、3人姉弟（長男5歳、次男2歳）の一番上、といってもまだ8歳だった。母親は2年前に、別の男の元へ走った。それまで夫からひどい暴力を受けていたとはいえ、当時生まれて間もなかった次男を置いての家出であった。

ある日、長期欠席を心配した担任が家庭訪問をして彼女の生活実態を知り、児童相談所に虐待として通報した。児童福祉司は何度も家庭訪問をしたが、養父に強く拒まれた。

一時保護所では淡々と弟たちの面倒を見て過ごし

紆余曲折を経て、姉弟は児童養護施設に措置された。A子に変化が起こったのは、そこからである。施設における粗暴な言動や行為が増えていき、やがて同室の子どもの持ち物を盗ったことをたしなめた先生への暴力事件を引き起こしたのだ。

参加者は、それぞれの立場から A 子のこころの痛みと今の問題とのつながりを論じていた。熱心で重くて出口の見えないやりとりを聞きながら、わたしの意識レベルは確実に下がっていった。

「なにが縛ってるんですかね、この会議を・・・」
(そんな気味が悪いことを)

（けど、トラウマみたいなものは確かに抱えている
 でしょう？）

(まだ、そんな話は出てませんが、生育史を見た

ら明らかだと思います)

「こんな仕事してるとどうしても虐待に目がいってしまふ、それを性(さが)だなんて言ってしまったら、それは違うやろ! ってツッコミたくなるけど。いや、ちょっと待って。なんか、似てる気がしません?」

(誰が? 誰と?)

「だから、みんなが、A子と」。ここに至って、やっと自分が何を言いたいかがわかってきた。

「ほら、みんなが自分の役割をもってここに集まって、その枠からしかものごとを見ようとしていないでしょ。それって、A子と同じじゃないですか? 彼女も自分の役割に縛られて、その枠で自分と周りとの関係を見てるわけで」

(A子はこころのキズに縛られてるんじゃないんですか?)

「そうかなあ、さっき話が出てたけど、一時保護中、母親は面会には来ず、弟たちをお願い、いつか迎えに行くから、みたいな電話があったんですって? たぶん、同じようなことを、子どもたちを置いて出る際にA子に言い残したんじゃないかと思うんです。良心の仮借か、言い訳か、調子のよさか、そこまでは分からないけど」。

「でね、A子はその日を夢に見て懸命に養父の世話をし、弟たちを守ってきたと思います。それを真に受ける以外に、なんの支えもないわけやから。幸せだった頃の家庭、やさしかった母親をどんどん膨らませてイメージし、自分さえ我慢して頑張ればもう一度そこに戻れる、そんなストーリーをずっと生きてきた。そして実際に、この家になくってはならない人間となってしまった。妻・母親代わりの枠にはまりきったわけです。それを耐えたのは、たぶん、彼女のストーリーが“家族は再統合する”というエンディングになってるからだと思います。

ところが、施設に行くと予想もしないことが待っていた。ぜんぜん自分のストーリー通りにいかないわけですよ。だって、母親代わりという自分の役割が無い。弟たちは、先生方がしっかりと面倒を見てくれる。それどころか、自分のことまで世話してくれる」

(そのどこがいけなかったんですか?)

「この役割のかなめは、家族に自分が必要とされて

いる、そこです。そこが、空白になってしまった。それはA子の支えただただけでなく、幸せな日に戻る約束の切符でもあったのに」

3. ツボをめぐる

わたしは、ケースのツボはトラウマではなく役割だと臭ったんです。こころのキズは、確かにケースの中核部分でしょう。それはケース全体を支える骨格です。ですが、ツボじゃありません。中核からは、彼女にどんな援助が必要かという方向に議論がすすみます。でも役割というツボからは、A子がどんな役割を持ってどんなストーリーを生きるかという話になります。

中核が骨組織なら、ツボは外界と接する皮膚組織です。骨折は専門家が扱います。たとえば、この機会に天使の衣装を脱いですべてを吐き出せばいい、という意見が多くありました。その場合、彼女の記憶の中で期待が作った母親イメージと、絶望によって塗り替えられた母親像との落差に折り合いをつけるには、こころの専門家の手助けが要るでしょう。

一方、皮膚の擦過傷は自分で手当てします。新しく見つける自分の役割、自分が必要とされている外の世界を生きていくストーリー、それらは生活の中で作られるものです。

骨折と擦過傷、どちらが深いとか正しいといった話ではありません。そんなことは誰にもわかりません。ただ援助者は選ぶことができます、外科医じゃないですから。そしてA子は援助者を選び、その人に自分のストーリーを語り生きていくわけです。

さて、会議では役割という言葉はみんなの腑に落ちたように見えました。そして、施設職員は帰ってすぐそれを処遇に反映してくれました。もちろん、それでA子の問題が一挙に解決するわけではありません。

記憶のひとつひとつはそのままであっても、それをどう振り返り、どんなふう語るかは変わります。トラウマと違って役割は、新たなストーリーの中ではがすことも新たに与えることもできるでしょう。役割は、そうした可能性を秘めたツボでした。

ケースのツボとそこに 合わさる言葉（２）

岡田 隆介

児童精神科医

今回も、「ケースのツボとそこに合わさる言葉」がテーマです。体験をヒントに創作した事例をもとに話を進めたいと思います。

1. 初診時の情報

初診のカルテには、家族が記入した相談カードがはさまれています。私は、それに目を通す前に簡単な家族関係図を描いて眺めます。その年齢と家族構成から、いろいろ思いを巡らすのです。

まず、来談者について考えます。通常、登場するのは家族でいちばん困っている人です。「大方のように母親が一人で来ているだろうか。小学生までなら子どもも一緒だろうな。相談内容によっては父親も一緒かも」と想像します。そして主訴です。「母親だけなら、学校での不適応だろう。子どもが一緒なら、発達障害とか知的障害の相談かな。父親が来ていたら、たとえば金銭持ち出しとか徘徊のような育てにくさの相談ではないだろうか」。最後は家族関係です。来談のメンバー構成から、主訴となっている問題の大きさ、家族のつながりがおおまかに推測できます。

こういったことは、家族が書いた用紙を見ればすむことです。それをせずに想像するのは、自分の中で家族への関心がたかまっていくからです。それによって、面接の中で尋ねたいことははっきりしてきます。これは、家族と会う前の頭の柔軟体操です。

2. 診察室で

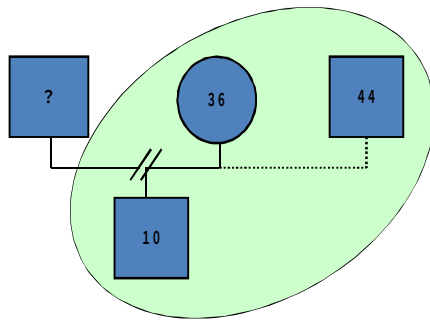
ですが、今回のケースはちょっと違う形でスタートしました。「次の人、どうぞ」と呼びかけると、顔見知りのケー

スワーカーがふてくされた様子の男の子の手をひいて入室してきたのです。後ろを見ても家族は見えません。「えっ、どういうこと？」。ケースワーカーの説明は、次のようでした。「彼は、早朝に〇〇署の署員につれられて一時保護所にきました。原付盗および無免許運転で補導されたんです。小学生だと思われますが、いくら名前とか住所を聞いても一切返事をしないんです。朝のラジオ体操が始まる前に無断外出を試み、どうしても家に帰ると言って大暴れしまして、そのとき腕のところをちょっとケガしたので診てもらえませんか？」「それだけ？ほんとに？」「いや、できたら名前とか聞き出してもらえたら」「やっぱり。ケガは診るけど…。どこ？ちょっと見せてね」。白衣の人間が痛いところを触るのだから、返事などするわけがありません。

「いや、精神科医ならなんでも聞き出してくれるかなと思って」、「キミらワーカーくらいだよ、やたらと精神科に来て話を聴いて欲しがるのは。不覚にも補導され、有無を言わず連れてこられて、しゃべる気になるわけないよねえ。それで、痛むのはどこ？」と、そこにノックがありました。「話を聞いて、ひょっとしたら自分の関わっている子どもかもしれないと思って」と、別の児童福祉司が入ってきます。「どうぞ」、「おっ、B男くんじゃないか」、「あっ、先生！」、「彼は、半年くらい前に、学校から相談を受けて家庭訪問をした生徒です。間違いありません。ねえ、どうしたの？」。そして、誰もいなくなりました。

「乗り損ねた舟」みたいな気分になって、1週間後、件の福祉司をつかまえその後の様子を聞きました。彼と会ってからというもの、Bくんはすっかり一時保護所に馴染んで生活しているとのことでした。そのときに知らされたのが、次のジェノグラムです。

家族関係図



これを見ると想像癖にスイッチが入ります。「母子と内縁の男性というのは、よくある組み合わせだな。母親の結婚から離婚、そして男性と付き合う時期と経緯はどうなんだろう。20代半ばでの出産だから、経済的な理由よりも夫婦間の問題かな。親権を母親が取ったのは、どんな話し合いの結果だろう。それぞれの、とりわけ母方の実家はどのような動きをしたかな。なんとなく、Bくんはずっと父親とは会っていない気がするけど、どんな思い出が残っているだろう」。さらに想像は続きます。「いまは男性と一緒に住んでいるのかな、それとも通ってきて泊まっていくのか、あるいは母親が子どもを置いて出かけるのか。知り合ったのは、子どもが何歳の頃だろう。男性と付き合っていることを、子どもはどうみているのかな。その人について、子どもは何かを言えるのだろうか」。こういったことは、相談内容と深く関連しているはずです。母親の家族観とか将来像についても、知りたいところです。

こうして家族への関心が高まると、いろいろ確かめたくなります。とそこに、児童福祉司の声が割り込んできました。「あの、ちょっといいですか?」、「いいけど」、「実は、彼、学校で対教師暴力や器物破壊を繰り返している子どもとで、クラス担任が家族に相談を持ちかけるも連携できず困っていました。そのあたりから、自分がかかわるようになったんです。Bくんの家庭は、夜間にスーパーでパートをしている母親と、数年前から一緒に住

むようになった内縁の男性との三人家族なんですが、実は夕べ、Bくんの口から1年くらい前よりその男性から乱暴されているという話がでたんです。そしたら、これは虐待ケースだってことになって…」

虐待という単語が飛び交い出すと、俄然、児童相談所の動きが変わってきます。それ以前は、学校からは「問題の多い困った生徒」と見られ、児相は「監護不適の教護ケース」とみていました。そして、家族はずっと学校・児相に対し距離を置いていました。ところが「虐待ケース」となって家族は一転して強硬になり、連日、引き取りを求めて児童相談所に押しかけて来ました。

子どもの心は揺れていました。当初は無断外出をしても帰ろうとしていたのに、いまは家には帰りたがらず、施設にも行かないと言い張ります。児相も揺れました。子ども言動の受け止め方が、非行チームと虐待チームでずれてきたのです。その狭間で担当の児童福祉司は、「問題は彼じゃない、大人の身勝手さだ」と一人で苛立っていました。思わず「問題って?」と彼に尋ねると、彼は「上司は虐待だから帰すわけにはいかないと言うし、家族は学校や児相への意地で手放さないとと言うし、学校はどこかに行けばそれでいいという感じで、当のBくんの気持ちはどっかに行っちゃってます」と言います。

こうなると、もう乗りかかった舟です。そこで担当福祉司を空いた部屋に誘い、二人で関係者をつなぐ糸をたどってみることにしました。

3. 糸のつながり

「Bくんが学校で暴れるよね、するとどうなる?」

「困った学校が、母親に協力を求めます」

「何とかしてと迫られて、今度は母親が困るよね」

「はい。口では反発しても、実際は困っていたでしょう」

「で、同居の男性にすがる」

「それしかないでしょう」

「男性は、彼なりのやり方で、つまり暴力でBくんを叱る」

「そうです。Bくんは男性には歯が立ちません」

「そこで彼は、怒りの矛先を家族にチクった担任に向け

る」

「そして、教室で荒れます」

「すると学校は、あれほど頼んだのにあの家族は、と苛立ちを込めてまた連絡する」

「母親はいっそう追いつめられ、ますます男性に頼るでしょうね」

「男性は、期待に応えようとさらに力を込めてBクンを殴る。そして、Bクンは母親からの見捨てられ感を強めながらますます学校で暴れる」

「つまり、みんなが苛立って、怒りを膨らませながら回り続けてるってことですか？」

「これって、やっぱり誰かが悪いのかな？この連鎖が続けば続くほどは、母親は男性を必要とし、男性は意気を感じて力でねじ伏せようとする。外圧が強くなればなるほど、男性と母は排他的に結びつきを強め、その分だけBクンは疎外感を増していく。この連鎖の一翼を、自分もしっかり担っていることにB君はぜんぜん気付いていないよね」

「むしろ、彼自身が連鎖のエネルギー源ですね」

「Bクンには母親が必要だけど、Bクンが荒れる限り母親は男性のほうが必要になる。男性は、この家にいるためにBクンが荒れていることが必要だ。さてこの糸だけど、どこかが切れたらグルグル回らなくなるだろう？」

「いままで、親子関係を調整するために男性と母親の間になんとかくさびを、とばかり思っていました。ですけど、もっと扱いやすい糸がほかにありそうな気がしてきました」

担当福祉司は処遇協議の場で糸のつながりを謳い、その結果、児童福祉司指導となりました。そして彼は学校に対し、「今後、学校内で生じた問題は児相と一緒に取り組みます。学校での処遇協議にも出向きます。ですから、家族に学校で起きた問題のすべてを伝えるのは控えてもらえないでしょうか」と提案しました。学校と母親とをつなぐ糸に介入したのです。

やがて徐々に、変化がはじまりました。私は、勝手に次のような想像をしました。学校からの苦情（連絡）が減ったことで、母親の心に余裕が生まれ→男性は悪役か

ら解放され→母親の中で男性に依存する部分が減り→男性の存在価値がやや低下し→母親のゆとりがBクンにむけられ→Bクンの問題が減少し→母親は学校と児相に感謝して協力的になり→Bクンは学校と家に居場所ができて→…。

4. ケースのツボ

このケースのツボは、Bクンと母親と男性と学校と児相をつなぐ糸です。誰もが当初、①母と男性のつながりを「腐れ縁」、②男性とBクンのつながりを「虐待」、③母とBクンのつながりを「拒否」、④学校と家族のつながりを「不信」としていました。いずれも、救い難いネガティブな糸です。担当福祉司と私は、①の糸に男性への「依頼・傾斜」、②の糸に男性の「見せ場・悪役」、③の糸に「混乱・困惑」、④の糸に「情報過多」という言葉をあてました。

最初の方は、問題とか弱みとかリスクという糸でつながっている人間関係です。後の方だと、関係そのものよりも糸のシステムに目がいきます。それが見えた（気がした）のは、一貫して離れたところに立っていたからでした。「遠くからしれっとケースを見るのも悪くないな」、本気でそう思いました。

ケースのツボとそこに 合わさる言葉（3）

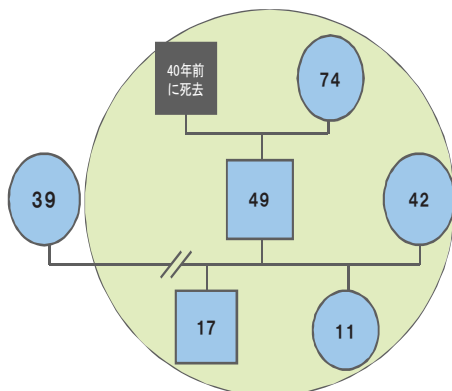
岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

（1） 家族関係図から

いつものようにインテイクされた初診情報をもとに家族関係図を作成し（図1）、それを眺めながら家族への思いを巡らす。

X-23 清掃会社を興す
X-19 結婚
X-17 長男出産
X-12 離婚 親権は実父。同居の祖母が養育。
X-11 再婚 長女出産



「祖母は34歳の時、9歳の息子をかかえて寡婦となり、再婚せず子どもを育てている。苦労したぶん、祖母と実父のつながりは強いだろう（少なくとも祖母の思い入れは深い）」

「実父は26歳で会社を興し身を粉にして働いたと思うが、多忙で疲れた夫と10歳年下の妻の関係はどうだっただろう。そのときの実父の体験は、再婚した家庭に生かさ

れているだろうか」

「実父が親権をとったということは、実母の養育が離婚の原因となったのではないか。あるいは、祖母との折り合いが悪かったのか。後者なら、再婚後も同じことを繰り返す可能性がある」

「再婚によって祖母は孫を奪われたのか、それとも子育てから解放されたのか。長男は誰と暮らしたかったか。どんな家族構成でスタートするかは、どういった話し合いで決まったのか」

「再婚した女性は、長男と養子縁組をしたのか（養母か継母か）」

「仕事から厳しくて体罰も辞さない一方で、家のことは女性にまかせっきりという父親ではないだろうか。そうすると青年になった長男との衝突が考えられるが、そのことは今回の問題の背景にありそうな気がする」

「三世代家族の軋みはどの関係の揺らぎで吸収されていか、実権はだれにあるか」

家族への関心を高め、これらの疑問への自分なりの回答を用意する。いずれ面接で明らかになることばかりだが、前段階だからこそ自由にイメージが膨らむ。それは、この家族への臨床的興味と援助意欲の高まりへとつながっていく。

（2） こんな家族だった

実父は工業高校を卒業し、土建会社や産業廃棄物処理会社で働いた。高校時代に他校生徒と暴力事件を起こして停学になったことがあるなど気性は激しいが、まじ

めで会社での評価は高かった。当時、食事など身の周りのことは同居の祖母が行っていた。

26歳で独立し、清掃会社を興す。その後、仕事仲間から紹介されて10歳年下の実母と結婚。(祖母とは別居)。ところが、二十歳をすぎたばかりの実母は子どもを車に残してパチンコに興じたり、何社もの消費者金融から借金して無断で外泊するなど、養育のネグレクトを続けた。そんな妻に夫は暴力をふるうようになり、二人は本児が5歳の時に離婚した。

引き取って育てた父方祖母は、実母を憎むあまり、繰り返し「母親の借金と浮気のせいで両親が別れた」と本児に言って聞かせた。一方父親は、借金返済と仕事に忙しく、ほとんど子どもの顔を見ない状態であった。

やがて建設関係の仕事が軌道にのり、父親は会社で経理をしていた女性と再婚。二人の間に生まれた子どもが3歳になったとき、実父の強い希望で祖母と本児を引き取った。そのとき、本児は小学校3年であった。

継母は、二人の子どもの世話と経理の仕事を黙々とこなした。しかし、注意されても自分のやり方を変えない本児と強迫的に頑張る継母との間には徐々に緊張感が増していった。

中学生になると本児は学校をさぼってゲームセンターに入り浸り、2年からは金銭持ちだし・万引き・原付の無免許運転が始まった(補導歴はない)。ふだんほとんど接しない父親は、問題が起きたときだけ継母の制止を振り切って殴った。そして中3の秋、彼は家を飛び出し友人宅に転がり込む。その家族とは長い付き合いがあり、礼を尽くして好意に甘えることになった。

このような状況で、継母との相談面接が始まった。その後、本児は頑張って卒業し、自分の意志で県外の全寮制の高校にすすんだ。このときの相談はここで終わった。

それから2年以上たったある日、継母が以前と同じように一人で来談しその後の経過を語った。高校に入学して半年くらいは、学校でも寮でも目立たない生徒だった。1年生の後半から急に身長が伸び、所属していたバスケットボール部で頭角を現し、2年では中心選手となった。そして県大会で大活躍し、3年になってバスケット部のキャプテンとなり、学校でも注目される存在となった。

身長と同じテンポで態度も大きくなり、寮での規則違反が目立つようになった。寮長は、それに体罰で応えた。

そしてついにつかみ合いとなり、寮長にケガを負わせ、自宅謹慎の処分を受けるに至った。

母親との面接が3回続いたのち、家族合同面接が実現した。

(3) 診察室で

緊張気味の父親は、本児を前にして「息子はおだてられて調子に乗ったアホウだ」と吐き捨てるように言う。たちまち、部屋の空気は凍りつく。すかさず継母が、夫(実父)の一方的な言い方をたしなめつつ、寮の生活が息苦しかったのではないかと取りなす。それをうけて、本児は退学になっても別にかまわないとうそぶく。それを聞いた父親がいきり立つ、といった具合で面接がすすむ。

まるでストリートバスケット3on3のように3人でボールを回す様子には、息苦しい緊張の中でも決して致命的な決裂に至らないわきまえがあるように見えた。ただいつまでも続きそうだったので、タイミングを見計らって外から本児にボールを投げてみた。

「県のリバウンド王なんだってね?」。「(本児)まあ」。「リバウンド王ってみんなそうなん?」。「(本児)??」。「キミも、デニス・ロッドマンや桜木花道みたいなタイプ?」。「(本児)誰っすか、それ」。「うそお、知らんの?態度のでかい超有名なスターを」。「(本児)さあ、どのチームっすか?」。

すかさず、「おまえ、スラムダンク、知らんのか」と、父親が入ってくる。先ほどまでとは違って、いい表情である。そういえば、花道のチームメートでセンターバックのゴリに似てなくもない。父親と私は、ひとしきり、ひと昔からふた昔前のNBAやスラムダンクの話で盛り上がった。実際、楽しいやりとりだった。横の本児は「わけがわからん」といった表情だが、不快感はない。継母は本児をそっこのけに弾む話にイラっとしたようで、軽く夫を諷める。かまわず私は、3on3に戻らぬように話を続けた。

すると、本児が「自分は、本当はダンカンみたいになりたい」と割り込んできた。「ダンカン?」、父親が尋ねる。「たけし軍団の?」と私(予想外にウケた)。そこからは、彼のリードでバスケットの話が続く。継母は動かない。ダンカン Tim Duncan とは、サンアントニオ・スパーズのパワー・フォワードだそうで、わたしたちはしばらく現役のNBAスター選手の話に耳を傾けた。

いい感じにこなれたところで、父親に話を振る。「自分のことを必要としている人がいる、その種の気持ちの大切さは会社を経営しておられるとおわかりですね。お父さんなんか、頼りにされたら何だってしてあげたくなるタイプと違いますか?」。ちょっと驚きながらも、父親は力強く頷く。次いで継母に、「お継母さんだって、みんなから頼りにされているからこそ、こうやって孤軍奮闘しておられるわけでしょ?」と振る。わが意を得たり、と微笑む。

「リバウンド王はどう?」とむけると、彼はボソボソと部活での様子を話す。「そうか、やっぱりキミもそうか。頼りにされ、必要とされ、任されている感じ、そういうの、いままでに経験したことあった?」。「(本児)ない」ときっぱり。「そうか、生まれてはじめて、生きるってこういうことか、みたいな感じを味わったんや。ねえ、どんな努力をしたの? そんなふう、あてにされるプレイヤーになるために」。彼はクラブでのキャプテンの仕事とかクラスでのけんかの仲裁などを身振り手振りで生き生きと語り、両親はじっと耳を傾ける。

「(両親に)きっと生まれてこの方、家で頼りにされたことなんかなかったから、でしょう? だから、クラブや教室での感触を寮という生活の場でも確かめてみたくなっただんじゃないかな。仲間と同じように、大人に対してもこれでイケるのかどうかを。(彼に)どう?」。「(本児)う〜ん」。「もしかして、少々ルールを破っても自分を必要とする空気はみじんも揺るがない、そんな手応えが欲しかったのかなあ」。「(本児)そうかもしれん」。「ただ、身体がでかいぶんだけ揺さぶり過ぎたみたいだけど(笑)」。彼よりも先に、両親が頷いた。

「(本児に)ねらいはいいと思う。すごくいい。全然間違っていない。方法はうまくないけどね。不思議に思うのは、せっかくそこまでやったのに結果を確かめていないこと。どうして?」。「(本児)??」「いま、キミのいないバスケット部はどんな成績をおさめているか、キミがいない寮やクラスはどんな雰囲気になってるか。バスケット部員、クラスメイト、寮長、先生たちは、キミが抜けた穴をどんなふう実感しているか。知りたくない? 自分の値うちを」。「(本児)知りたい!」。「そうよね、その目で確かめるには、どうしたらいいかな」。「(本児)やっぱ、寮の先生にあって・・・謝る・・・」。「うん、そこからだよ。やる?」。「頷く」。「これで、今回のことはキミの価うちを確かめる絶

好のチャンスになったわけや」

(4) ツボ

父親の「軽薄なお調子乗り説」、学校や寮長の「テングになった説」を受けて、本児は「自分を取るに足らない男説」に傾きかけていた。わたしがどれかにくみすると、それで決まりという雰囲気だった。そんな状況のもと、彼を「リバウンド王」と呼んだ。そして、普通にデニス・ロッドマン(80~90年代に活躍、狂気のリバウンダーと称された)と桜木花道(90年代に一世を風靡したマンガ、スラムダンクの主人公)を連想し、そう口にした。

彼自身は、字義通りリバウンドの名人と受け取った。それは「取るに足らない男」の対局にあり、受け入れやすいものだったと思う。父親は、リバウンド王→デニス・ロッドマン・桜木花道→「やんちゃ」と連想し、その先に若かりし頃の自分自身がいたのではないだろうか。

父子ともどもリバウンド王が腑に落ちた流れの中で、スラムダンクのストーリーと重ねながら、わたしは彼にプレイヤーの値うち、人間の値うちを語った。そして、いまの自宅謹慎は自分の値うちを確認する絶好のチャンスという方向に話を進めた。父は息子のなかに自分を見、息子は父親の体温を感じ、バスケットは父子をつなぐ血脈となりつつあった。

振り返ってみて、ツボは一番の弱点を強みに変えた「リバウンド王」だった。周囲から「役に立たぬやっかいもの」という評価を集めた彼の弱点が、ヒーローになる強みに変わったのだ。まるで桜木花道のような変身は、それまで気付きもしなかった「仲間から頼りにされ、必要とされ、任された体験」に思い至り、自分の役割を考えることによって可能になったのだと思う。それは、かつて自分の気持ちとは関係なく突き放されたり哀れまれたりした生活にはないものだった。

寮長のリバウンドを取り損ねたことは、この家族に一本の斜交いを入れるいい機会になったと思うが、最後まで見届けることはせず、後は父親に任せた。そのことを通じて、父親自身のストーリーも変わっていくことを期待して。

誌上ひとりワークショップ (前編)

～家族援助は街のアパレル～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

私は、聴衆の反応を取り入れたり織り込んだりしながら話すのが好きです。ワークショップも基本的に変わらないと思うのですが、こっちは大の苦手です。おそらく、参加者がディスカッションをしている時間帯に自分のリズムが途切れてしまうせいでしょう。

そんなわけで、今回、誌上で一人ワークショップをしてみようと思い立ちました。ケース提出も進行も講師も参加者も、すべてひとりでやります。ワークショップというよりはアンテナショップでしょうか。では、早速始めたいと思います。

1. 仕立て屋的家族援助

「はじめに、わたしが家族援助をどのように考えているかを説明しておきたいと思います。本日のワークはそれに基づいたものになりますので、ちょっと我慢して聞いてください。

解決に向けて効果的な手立てを考えるとと言う意味において、身体的な援助も心の援助も基本的に同じです。それまでの解決策では期待した成果が得られなかったわけで、援助は新たな解決策を考えるという方向にすすみます。

とはいえ、それまでの解決策はその人なりの問題の理解・仮説を根拠に組み立てられていますから、そう簡単にえられるものではありません。さらにこの仮説は、そのひとりの人生観・信念によって支えられています。これは生きる枠組みそのものであって、各論に対する総論、家族の憲法みたいなものです。そんなものまで家族援助に含まれるのだろうかと考えると、とても気(荷)が重くなってしまう。さて、そんな家族援助とかけて街のアパレル・仕立て屋と説きます。そのころは、以下の通りです。

まず憲法、つまり生きる枠組みですが、これは援助対象の家族が肌身離さず付けていて、他人に見せびらかしたりしないものです。つまり、下着(アンダーウェア)です。仕立て屋は、下着にまで口を出しません。個人的なものですから。

その上に着るシャツ(ブラウス)、これが問題の理解・仮説です。仕立て屋からすると、全体を損なわせているのはこのシャツです。それこそが、仕立て屋が腕を振るう場所になります。ですが、家族はシャツの上にいろいろ着ていて、それらを脱いでもらわないとうまく仕立てられません。

一番上にまとっているのは、問題にまつわる不安のコートです。援助対象の家族は例外なくコートを着ています。コートの裏地は怒りですが、なかには裏表が反対の方もいます。表が怒りという派手目のコートです。以前は児童相談所でしかみることはなかったのですが、最近はけっこう流行しているようです。

大方の仕立て屋は、共感的に接しながらこのコートを脱がせます。ここでうっかり裏地を見逃すと、怒りに火がつくこともあります。怒りだけを扱うのは至難の業で、これはあくまで不安と一体にして受け止めるのがいいでしょう。

仕立て屋の腕に信頼を寄せると、家族はコートを脱ぎます。ここでジャケットの登場です。ジャケットは、問題を解決するために重ねてきた努力です。実際似合っていないにもかかわらず、ずっと同じものを着続けています。それは、先述のようにジャケット(解決努力)はシャツ(仮説)と一体だからです。

ジャケットを脱いでもらうには、この解決努力に敬意を表しねざらねばなりません。成果を得られなかったにせよ、家族が良かれと思ってやってきた努力なのですから。虐待だって、非行だって、不登校だって、素性は解決努力です。いっこうに楽にならなくても、他の策には目がいかず、問題が長引いたり大きくなったりしています。それを変えようと提案する以上、なにはともあれしっかりねざらしましょう。その上で代替案を用意します。

ジャケットを脱ぐと、やっとシャツが露わになります。ここで、家族なりの問題の理解・仮説が語られるのです。「そもそも」と振り返り「～が問題だ」と訴えるストーリーが深ければ深いほど、それを支える人生観も一緒に伝わってきます。ここが、大切なところです。

そして、シャツを見立てます。基本は、いま着用しているシャツを脱いでもらって新しいものをすすめるか、そのシャツを生かす方向でいくかです。ただ、これは仕立て屋が勝手に決めるものではありません。家族との間合いで、自然に決まっていくものです。

前者では、替わりの説明を用意します。“専門家”として「そうではなくて、問題は～だと考えられます。ですから、～をやってみませんか」と具体的に示すのです。家族の問題理解を置き換えるのですから、当然、場の緊張が高まります。

その際、替わりの説明が相手の腑に落ちなければまったく意味がありません。そのためには、それ以前にいていない不安・怒りを受け止め、しっかり解決努力をねざらっておかねばなりません。またセットである新・解決策が具体的で、実行可能と思ってもらえることも大切です。

提案されたのが魅力的なシャツなら、家族はためらうことなく自分のシャツを脱いでそれを身につけるでしょう。魅力的とは、①原因を考えないでいい(自分を責めない)、②予想していなかった新鮮さ(新しい視点)、③実行可能に思えるプランがある、ということです。つまり、実現可能な明日をデザインしたシャツ、ということになります。

後者は、家族の仮説を否定しません。だからといって、受け入れるわけでもありません。全体としては賛成できないけど、部分的に生かせるところはたくさんあるといったリフォーム的なスタンスです。

「いま、ここで」くりひろげられている仮説と解決努力をひっくるめて、比較的うまくいってるところを探します。結果がでていない解決努力にも、いつもとの些細な「違い」を見つけます。無くても、創造的に探します。

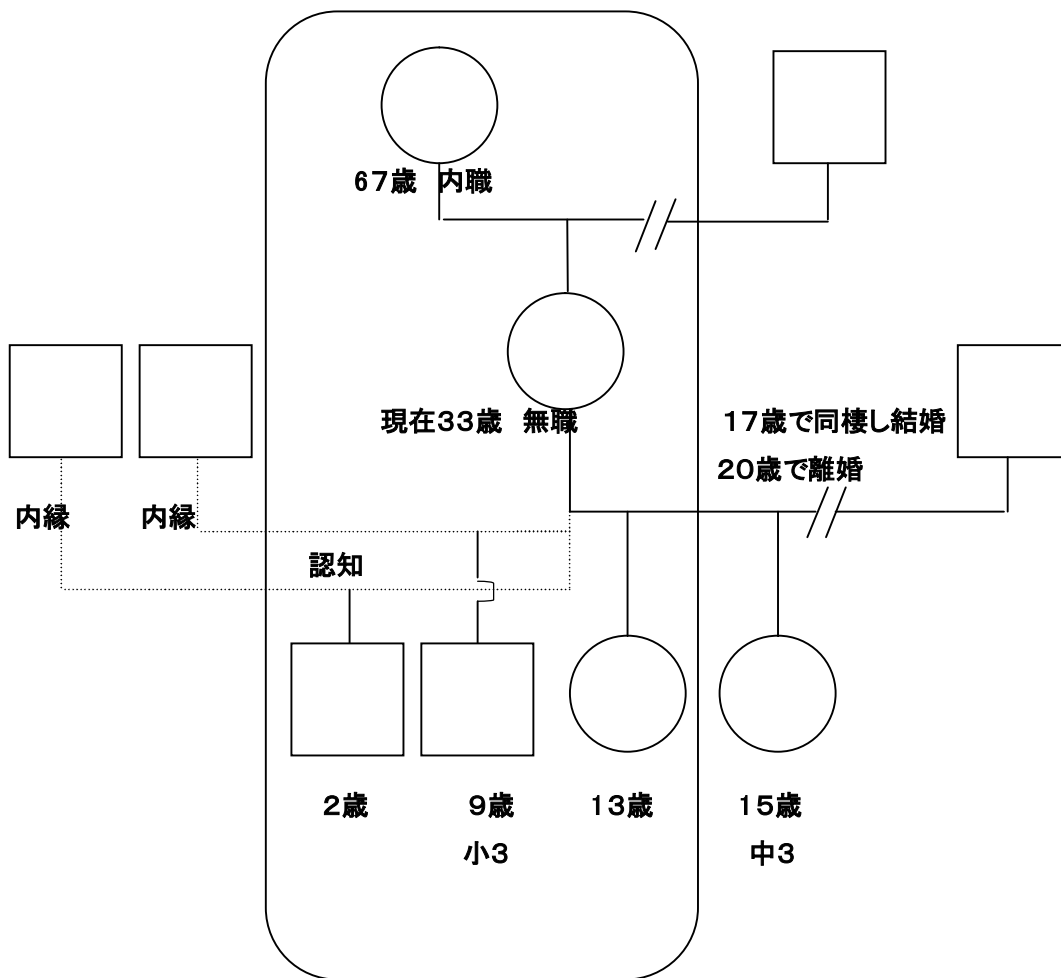
そして「ここのところは実によかった。是非、続けてほしい」とか、「どうやってそんなことを思いついたのか、教えてほしい」と解決志向的に接します。前者が明日を描いて見せる形だとすると、こちらは現在進行中のものに教わる形といえるかもしれません。

説明はこのくらいにして、いまから演習事例をもとに、不安・怒り・解決努力を探りながら家族の仮説にたどりつくプロセスと一緒に経験しましょう。

それでは4人ひと組になって自己紹介をし、書記と司会を選んでください。決まったら、班で家族図を見ながら、そこにある不自然さ、無理を話し合います。司会担当の方は発表者を選んでおいてください。書記の人は記録をお願いします」。

2. 家族を読む

演習事例の家族関係図(図1)



「では、演習事例のジェノグラムを見てください(図1)。ご覧のように、ごく限られた情報しかありません。そこから自由にこの家族をイメージしてみてください。どんな家族だろう、どんな問題を抱えていそうか、と想像します。わたしは、この手順を教えてくれた人たちの名前をとって、勝手に「団・早樫式」と呼んでおります。まとめるとこんな感じになります。

- ① 家族関係図をながめ、ここにある情報だけで、家族のライフスタイル(仕事・配偶者・住居等の選択の流儀、子どもの養育と生活維持の仕方、人との繋がり方等)を想像する。
- ② 不調和や無理の匂いがあるなら、どこか？
- ③ こうした作業を通して家族への興味が深まり、尋ねたいことや確かめたいことが明確になっていく。

誰でも行動するにあたり、いくつかの候補から選択しますね。ここに登場する母親だって、結婚や離婚の際に、あるいは子どもを誰が育てるかというときに、ある選択をしています。人生の節目における行動選択の仕方は、その人の人生観と密接につながっているはずです。そういった行動選択の流儀・くせも、ジェノグラムから見てくるでしょう。

(各班の家族イメージの報告を聞く)

「ずいぶんいろんな意見がでました。なかには、知ってるの？ みたないのもありましたが、当たっているかどうかはまったく関係がありません。少ない情報だからこそ見えてくるものがある、情報に縛られないからこそ気がつくところ

ろがある、そういうことを実感してもらいたいわけです。

さらに、ここまでの作業で、この家族にいい意味での好奇心、関心が持てたと思います。誰かが提出した知らないケースから、もう自分の関わっている事例になった気がしませんか。ここは、このやり方のすごいところです。

そして、もっともっと聞いてみたいことが生まれたと思います。そういう“聞いてみたいこと”も大事にしてほしいと思います。

では、みなさんが報告してくださったものは、ホワイトボードにまとめました。こちらのパーポイントにまとめたのは、わたしの感じたことです。大部分はみなさんの意見とかぶっていますね。

- 1) 母は、男性との距離感(親密になり方, 別れ方, 別れた後の関係)や子どもとの距離感(細やかな愛情表現はしない、完全なる拒否もしない)が独特な人だろう。原型は、母と祖母との関係ではないか。
- 2) 男と知り合い、子どもをつくって別れ、引き取って祖母にゆだねるという一連の行動選択を支える家族システムがあると思う。
- 3) 15歳女兒が相談の対象で、暗黙の家族ルールに反発して家を飛び出したのだろうが、力関係だけでなく得体の知れない引力があって苦しんでいるだろう。
- 4) 父の違う子どもたち同士、とりわけ同性間のかっとうは大きいだろう。
- 5) 男性からすると、明確な拒否も親密さもない三世代家族の結びつきが理解しがたいだろう。
- 6) 生活保護と母親のウラの稼ぎで支えられている母親優位の家族ではないか。
- 7) 不調和な家族構成のしわ寄せは、長女の異性交遊と家出徘徊、次女の弟たちや学校での乱暴行為として表れているだろう。

みなさんから、はやくケースの詳細を聴きたいという雰囲気伝わってきます。これも、この方式のすごいところだと思います。では、演習事例の詳細を説明します」。

3. こんな家族だった

「主役は、シンナーを28歳の男性Aの部屋で二人で吸引しているところを警察に補導された15歳中3の女兒です。Aとは結婚の約束をしているといいます。本児はやせていておとなしく、影が薄い感じ。頭痛や不眠を訴えるも幻覚・妄想は認めていません。食事は極めて小食。一時保護中の検査では、知的に軽度の障害がありました。

母は広島県で生まれ、小1のとき母方祖父母が離婚、祖母に引き取られました。母も、小学校時代から万引き・深夜徘徊で何度か児童相談所に一時保護されています。中学1年で家出し、臨県に住む祖父のところへ転がり込み、そちらの中学校に転校しました。高校在学中に、暴力団関係者を自称する本児の実父と知り合って同棲し、高校は中退しました。18歳のとき、本児を妊娠して出産。妹を出産直後に実父と別れ、祖母を頼って広島県に戻りました。祖父母からすれば、晴天の霹靂です。それ以降、本児の実父・祖父とは音信不通です。

翌年、母は二番目の男性と付き合うようになり、毎日足繁く通います。子育てはせず、本児や妹の世話は祖母がしました。本児は、この男性が父親だと思っていたようです。この男性はアルコールが入ると乱暴になりますが、本児に暴力をふるったことはありません。

祖母は母とは言い争いをしても、孫たちにはやさしかったようです。やがて二番目の男性との間に男児が生まれるも認知してもらえず、男とは疎遠になりました。母は異父弟を引き取り、祖母に託しました。

このころから徐々に本児が不安定となり、小1半ばには、徘徊・ケンカ・盗み等を頻発するようになりました。母はあいかわらずふらふらと家を空け、学校との連絡はすべて祖母がしていました。当時、本児は『母親とはそういうもの』と思っていたようです。収入は祖母の内職と児童手当で、ギリギリの生活でした。

その後、母は出会い系サイトで知り合った三番目の男性と交際を始めます。そして本児が小6のとき、その男性が

住む神奈川県に引っ越しました。本児としては卒業まで祖母宅にいたかったのですが、妹弟が行くというので従いました。母はその男性とは同居せず、近くに住んで生活保護を受けました。男性は訪問販売をして全国を転々とする生活で、不在がちでした。

本児は、この男性を極端に嫌いました。二人きりになることを極端に避け、母親が不在の夜には夜遅くまで徘徊しました。家出・リストカット・怠学等により、神奈川県の子童相談所に一時保護されこともあります。しかし、児童相談所ではほとんど胸の内を語っていません。このときは、母が男性と別れることを条件に家庭引き取りとなっています。

やがて第4子(男児)を産みましたが、男性が帰ってこないため広島に戻り、また祖母のもとに転がり込みました。神奈川県での2年近くは、実質、次女が異父弟たちのめんどうをみていました。

広島でも、子どもが多く体調もよくないと生活保護を受けました。あいかわらず母はふらふらと落ち着かず、子育ての中心は祖母でした。家の中はごみが散乱していて足の踏み場もない状態です。なお、母と三番目の男性との関係は現在も切れておらず、ときどきあっていました。あるとき、本児が男性と別れてほしいとんだところ、『そんなことを言うならあんたの面倒見ない』と言われ諦めたとのことでした。

本児は弟たちにきつくあたることはしませんが、面倒を見ることもほとんどありません。それに対し次女は、言葉遣いや行動が荒々しく異父弟たちにきつくあたりますが、面倒はよくみます。次女には補導歴はありません。本児と次女との関係は悪く、いつもいがみあっています。

広島でも夜間徘徊をしているところを補導され、一時保護されました。家庭引き取りとなったものの中学校に溶け込めず、不登校状態となりました。そのころ退学傾向のBと仲良くなり、Bの遊び仲間Aと知り合います。Aは無職で、過去に恐喝や詐欺で2度刑務所に入っています。

やがてAから告白されて受け入れ、Aの家に入り浸るようになります。学校は、A宅からときどき登校する状況でした。母はこのことに無関心で、学校もAのことは把握していませんでした。

やがてAは、母に対し本児と一緒に住みたいと申し入れます。母は『本児がそれを望み、Aが定職に就くならよい』と返答しました。しかしAは仕事をせず生活保護を受け、昼間からシンナーを吸引してフラフラするありさまでした。

本児と一緒に住むようになって、Aのシンナー依存の状況にショックを受けました。そして、自分が頑張るとめなければAは死んでしまうと考え、説得したりシンナーを隠したり必死を努力しました。しかし、Aは思いとどまるどころか一緒に吸いながらセックスをしようとつこく誘うばかりで、ついに好奇心に負けてしまいました。本児はシンナーを吸うことにためらいながらも、嫌われたくない、帰るところもない、という思いで同棲を続けていたようです。

あるとき、近所の住民からの通報でAの部屋に警察が踏み込みました。Aは現行犯で逮捕、本児は家庭裁判所送致となりました。この後初めて、本児は三番目の男性からレイプ被害を受けていたことを調査官に打ち明けました。

4. 家族を知る(不安と怒り)

「演習事例ではありますが、質問があればどうぞ」。

(質疑応答の後)

「ここからは、お手元にお配りしてある私版フォーマットに従って家族を知り、援助をすすめていきます。まずコートですね、家族の抱えている不安と怒りを知ります。それらが整理されて頭に入っていると、援助対象者のちょっとした心の動きとか言葉からそれを感じることができます」。

次いでジャケットです。家族の解決努力をきちんとねぎらうためには欠かせません。そしてシャツです。家族の仮説を知ったうえで、自分たちの仮説を考えます。もしかしたら、アンダーウェアについてもちょこっと話し合うかも知れません。

ちょうどきりがいいし、皆さんお疲れのようですのでひと休みしましょうか。では、そうですね、ゆっくりコーヒブレイクをしていただいて、3ヵ月後に続きをしたいと思います。やっと岡田版というところで終了というのはいかにも怪しい感じがしますが、よろしければ今秋、また誌上でお会いしましょう。

(中編に続く)

誌上ひとりワークショップ (中編)

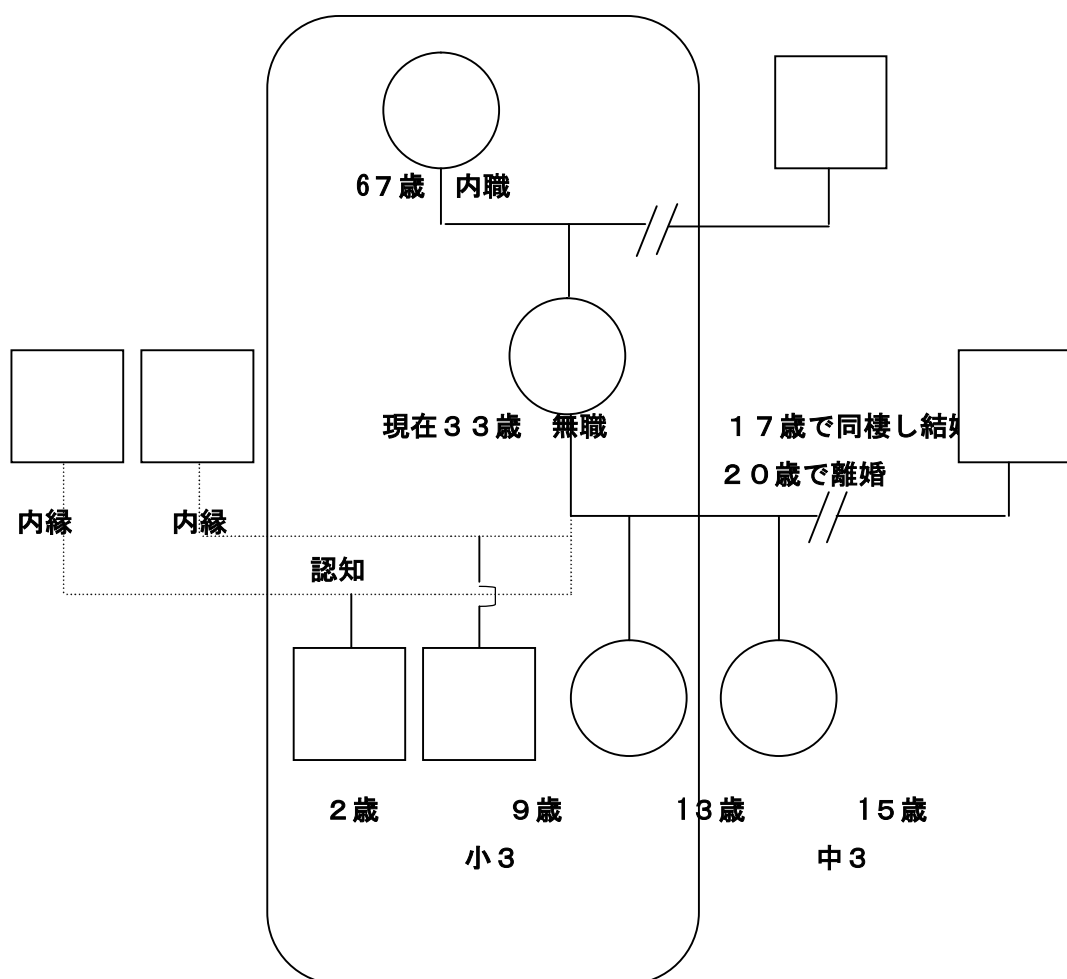
～家族を知る、家族を見立てる～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

「前号に引き続いて、誌上ひとりワークショップを進めていきたいと思います。今回は、ジェノグラムを通して「家族を知る」作業でした。今回は、お手元にお配りしてあるフォーマットに従って「家族を知る」手順をすすめていきます。3ヶ月も前の話なので、ここでもういちど事例検討のためにアレンジした症例をおさらいしておきます」。

演習事例の家族関係図（図1）



「主役は、28歳の男性(A 氏)の部屋で、二人でシンナーを吸引しているところを警察に補導された15歳中3の女児です。Aとは結婚の約束をしているといいます。

本児はやせていておとなしく、影が薄い感じです。頭痛や不眠を訴えますが、幻覚・妄想は認めていません。食事は極めて小食。一時保護中の検査では、知的に軽度の障害がありました。

母は広島県で生まれ、小 1 のとき母方祖父母が離婚、祖母に引き取られました。母も、小学校時代から万引き・深夜徘徊で何度か児童相談所に一時保護されています。中学1年で家出し、臨県に住む祖父のところへ転がり込み、そちらの中学校に転校しました。高校在学中に、暴力団関係者を自称する本児の実父と知り合って同棲し、高校は中退しました。18歳のとき、本児を妊娠して出産。二人目(妹)を出産直後に実父と別れ、祖母を頼って広島県に戻りました。祖父母からすれば、晴天の霹靂です。それ以降、本児の実父・祖父とは音信不通になっています。

翌年、母は二番目の男性と付き合いようになり、毎日足繁く通いました。子育てはせず、本児や妹の世話は祖母がしていました。本児は、二番目の男性を父親だと思っていました。この男性はアルコールが入ると乱暴になりますが、本児に暴力をふるったことはないようです。

祖母は母とは言い争いをしても、孫たちにはやさしかったとのこと。やがて二番目の男性との間に男児が生まれました。しかし認知してもらえず、男性とは疎遠になりました。母は男児(異父弟)を引き取り、祖母に託しました。

このころから徐々に本児が不安定となります。小1半ばには、徘徊・ケンカ・盗み等を頻発するようになりました。しかしながら母はあいかわらず家を空け、学校との連絡はすべて祖母がしていました。当時、本児は『母親とはそういうもの』と思っていたようです。収入は祖母の内職と児童手当で、ギリギリの生活でした。

その後、母は出会い系サイトで知り合った三番目の男性と交際を始めます。そして本児が小6のとき、その男性が住む神奈川県に引っ越しました。本児としては卒業まで祖母宅にいたかったのですが、妹弟が行くというので従いました。

母はその男性とは同居せず、近くに住んで生活保護を受けました。男性は訪問販売をして全国を転々とする人で、不在がちでした。

本児は、この男性を極端に嫌いました。二人きりになることを避け、母親が不在のときは夜遅くまで徘徊しました。この頃、家出・リストカット・怠学等により神奈川県の児童相談所に一時保護されました。しかし児童相談所ではほとんど胸の内を語らず、このときは母が男性と別れることを条件に家庭引き取りとなっています。

やがて、第4子(男児)を産みました。しかし男性が帰ってこないため広島に戻り、また祖母のもとに転がり込みました。神奈川県での2年近くは、実質、次女が異父弟たちのめんどうをみていました。

広島でも、子どもが多く体調もよくないと生活保護を受けました。あいかわらず母はふらふらと出歩き、子育ての中心は祖母でした。家の中はごみが散乱していて足の踏み場もない状態でした。

なお、母と三番目の男性との関係は現在も切れておらず、ときどきあっているようです。あるとき本児は、思い切って男性と別れてほしいと母に頼みました。母からは「そんなことを言うなら、もうあんたの面倒は見ない」と言われ、男性のことは諦めたそうです。

次女と違って、本児は弟たちにきつくあたることはしません。しかし、世話をすることもほとんどありません。次女は言葉遣いや行動が荒々しく異父弟たちにきつくあたったりしますが、面倒はよくみます。そんなわけで本児と次女の関係は悪く、いつもいがみあっています。なお、次女には補導歴はありません。

広島でも夜間徘徊をしているところを補導され、一時保護されました。家庭引き取りとなったものの中学校に溶け込めず、不登校状態となりました。そのころ退学傾向のBと仲良くなり、Bの遊び仲間Aと知り合います。Aは無職で、過去に恐喝や詐欺で2度刑務所に入っています。

やがてAから告白されて受け入れ、Aの家に入り浸るようになります。学校は、A宅からときどき登校する状況でした。母はこのことに無関心で、学校もAとのことは把握していませんでした。

やがてAは、母に対し本児と一緒に住みたいと申し入れます。母は『本児がそれを望み、Aが定職に就くならよい』と返答しました。しかしAは仕事をせず生活保護を受け、昼間からシンナーを吸引してフラフラするありさまでした。

本児は一緒に住むようになって、Aのシンナー依存の状況にショックを受けました。そして、自分が頑張るとめなければAは死んでしまうと考え、説得したりシンナーを隠したり必死で努力しました。しかし、Aは思いとどまるどころか一緒に吸いながらセックスをしようとしつこく誘うばかりで、ついに好奇心に負けてしまいました。本児はシンナーを吸うことにためらいながらも、嫌われたくない、帰るところもない、という思いで同棲を続けていたようです。

あるとき、近所の住民からの通報でAの部屋に警察が踏み込みました。Aは現行犯で逮捕、本児は家庭裁判所送致となりました。この後、本児は初めて三番目の男性からレイプ被害を受けていたことを調査官に打ち明けました」。

「ここで、いまからすすめていく“わたしの家族面接”の流れをざっと説明しておきます。表1の①～⑤が家族を知る手順です。前編でやってもらったのは、この①の部分に相当します。今回は②～⑤をやります。⑥の見立てと⑦以降の手立ては、次編以降になると思います。では、さっそく始めましょう」。

表1 わたしの家族面説の流れ

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 家族関係図から不調和や無理な匂いを感じ、結婚・離婚・問題への取り組み等の行動選択を探る。そこから家族への興味がたかまり、尋ねたいことや確かめたいことが明確になる。② 家族の不安と怒りを知る。③ 解決努力を知り、ねざらいつ問題を維持する相互作用を探す。④ 家族のリスクファクターを知る。⑤ 家族の強み(ストレングス)を見い出してエンパワーにつなげる(来て良かった、聞いてもらってよかった、気分が楽になった)。⑥ 家族の問題理解・仮説を知り、その背後の枠(人生観、信条)を感じる。 |
|---|

4. 家族の不安と怒り

「家族の抱えている不安とか怒りがあらかじめきちんと整理して頭に入っていると、援助対象者のちょっとした心の動きとか言葉からそれを感じることができます。また、的確な質問をすることによって当事者がそのことに気づききっかけにもなります。

この母親は、そして本児は、それぞれどのような不安・怒りを抱えているのでしょうか。そのことを各班で話し合ってください。前編ふう言えば、厚いオーバーコートを脱いでもらうための手続きです。班で話し合ったらフォーマットに書き込んでください。後で、報告していただきます」。

「はい、ありがとうございました。では、各班の意見を聞いてみたいと思います」。

(各班から報告)

「ありがとうございました。みなさんに報告していただいたものをまとめると、表2のようになります」。

表2 母親の不安と怒り

1. 男性との関係が長続きしない孤独感、深いところで影響し合うことへの不安（表面的なつきあい）
2. 母親らしくないと祖母や子どもに言われる意味が理解できない怒り
3. いつも経済的基盤が弱いことへの不安
4. 苦悩や怒りに向き合い、心にとどめることへの不安
5. いつも現在しか見ない（未来に絶望をみることへの不安）
6. 行動の原動力にもなっている祖母に対するあてつけ（怒り）
7. 学校・福祉・司法など社会システムへの基本的な不信・怒り
8. 日々自分に似てきて、やがて自分を脅かすかもしれない本児への不安と怒り

「どの程度まで不安を不安として抱えることができる家族かは、まだよくわかりません。ですが、それは援助面接の中でいろんな形をとって表れるはずです。援助者がこうした作業をしておく、そのときに見逃すことなくしっかり受け止めることができると思います。

では次に、本児自身の不安・怒りを考えましょう」。

「はい、ありがとうございました。では、各班の意見を聞いてみたいと思います」。

（各班から報告）

「では、表3に本児の不安をまとめてみます」。

表3 本児の不安と怒り

1. 母の都合、大人の都合で転々と住むところが変わった不安と怒り
2. 母の都合で出入りする男性が変わる不安と怒り
3. 母である前に女としてあけっぴろげに振る舞う母への不安と怒り
4. 生きていく上での選択肢のない絶望・怒り
5. レイプへの不安・怒り、自分を守ってくれない母への怒り
6. 自分の力のなさへの無力感、怒り
7. あてにならない学校・児相・大人たちへの不信・怒り
8. 学校の同年齢の生徒への違和感や疎外感・不安
9. はじめての自分の意志で決めたAとの生活が壊れることへの不安
10. 愛や熱意だけではAが動かないことへの不安・怒り
11. 人と深くかかわることへの不安

5. 家族の解決努力

「次は、家族なりに努力してきた対応策、つまり解決努力です。先ほども言いましたが、こちらから見ると問題行動で

も、当事者側から見ると解決努力ということはよくあります。同じ行為が改める必要のある問題行動であったり、またねぎらいの対象となる解決行動だったりするわけです。

もう一つ見逃してはならないのは、成果のない解決努力を続ける家族の相互性が、結果として問題を維持する働きをしてきた可能性があるということです。そのあたりも念頭において、各班で話し合っ用紙に書き込んでください」。

(各班から報告)

「皆さんと重なっていますが、私は表4のような解決努力をあげてみました」。

表4 家族の解決努力

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 祖母と次女が母に代わって幼い子供たちの面倒を見、家を守ろうとしている2. 初婚・再婚の際、夫と別れて祖母を頼って広島県に戻っている。いずれも、無責任な夫に子どもを任せなかった3. 過去のいきさつはあったが、祖母に信頼を寄せている4. 母は別れた男性とは距離を置き(初婚・再婚)、子どもたちを混乱させない5. 母が三番目の男性と同居しなかったのは、本児を守る意図があったのかもしれない6. 本児は、Aを立ち直らせて実家より安全な場所を自らの力で築こうとした7. 本児は他人(A)を大切にして嫌われないように努力し、育った家とは違う“家族”を築こうとした。 |
|---|

「2～5は母の男性遍歴であり、育児の放棄です。ですが、もしかしたら母なりの、その時その場で考える最大の解決策であったかもしれません。もちろん、1のように祖母や次女がきちんと家族機能を補完しているからこそ可能となったネグレクトです。解決努力でありながら他方で問題を持続させている相互性ともいえるでしょう。

6～7は、まさに今回の主たる問題行動です。ですが、彼女にしてみれば、母親の生き様との決別という解決行動です。母から距離を置こうとすればするほど男性と近くなり、問題そのものとして持続することになっています。

いずれも望ましい行動ではないし、いい結果をもたらしてもいません。ですから、この種の解決努力に終止符をうつよう働きかけたい。そこでまず、解決行動の動機の部分、そこをきちんとねぎらうことから始めます。その後で、こうした解決策を成立させている問題理解・仮説、さらには家族の相互性に迫っていきます」。

6. 家族のリスクと強み(ストレングス)

「次は、家族の危うさ・脆弱性を見ます。リスクファクターを探る作業は、みなさん、熟達しておられます。特に児童相談所関係の方は、このことに敏感です。子どもの命をまもるための基本ですから。しかし、家族だって指摘されるまでもなく、自分たちの脆弱性にはナーバスになっています。つまり、援助者も家族も同じところにしっかりと意識が向いているわけです。となれば、他に目が向かず正面衝突するのも自然の成り行きといえるかもしれません。

リスクの対極にあるのがストレングスです。探せば、どんな家族にも強みはあるわけで、ただ目が向いていないだけです。援助の対象となっている家族も、もちろん例外ではありません。ところが家族はネガティブでリスクなところを過度に意識し、自分たちに強みがあるなんて信じません。それはわたしたちが歯医者に行くとき、痛い歯以外にぜんぜん意識が向かないのとよく似ています。

家族はそうであっても、援助者が同じであってはいけません。援助者には、目の前の家族にストレングスを見い出

す強い意識が必要です。ネガティブな部分をポジティブに見ることができたら、計算上プラスマイナスで2倍になるわけです。そういったことを念頭に置いて、各班でまず家族の危うさ・脆弱性について話し合っただけで記録してください」。

（各班から報告）

「はい、ありがとうございました。みなさん慣れているみたいですね、家族のリスクや脆弱性をめぐる話し合いはとても活発に行われていました。それでは、報告してくれた各班の意見に私の考えも加えて整理してみます（表5）。他にもあったかも知れませんが、漏れがあったら補ってください」。

表5 家族のリスクファクター

1. 母が今後も同じことを繰り返し、妹以下、新たな問題を起こす可能性
2. 本児が母の生き方を堂々と批判した場合、母はそれを受け止めきれず、祖母・妹次第で家族は崩壊する
3. 母に反発しつつも、自分もさほど変わらないことに気づいた場合の本児のアイデンティティの揺らぎ
4. これからも経済的には不安定な状態が続く
5. Aと引き離された後の本児のケアがなされるかどうか
6. 性虐待の問題は手つかずのままであること

「では次に、この家族のストレングス、強みを見い出しましょう。注意深く探してください、家族援助の一つのキモですから。先ほど行ったように、マイナスをプラスに見ることが出来ないか、そのあたりも念頭に話し合ってください」。

（各班から報告）

「はい、ありがとうございました。驚くような意見もできました。表6に整理してみましたが、1番と4番は2倍ポイントでしょうね。それから、5番もいいですね」。

表6 家族のストレングス

1. とにかくにも、生んだ子どもを見捨てず、引き受ける母であること
2. 母に代わり（黙々と）養育を引き受ける祖母・妹の存在
3. Aとのことを通して、はじめて母に翻弄されず、自分のことを自分で決める体験が出来たこと
4. 男たちに対する母の一方的な依存とは違い、Aのことを考えて行動選択した本児の成長
5. 本児のこれからについて、「人の役に立つ、人を支える」をキーワードとして使える可能性があること
6. 性虐待を打ち明けられる人と出会えたこと

「ここまで、援助対象の家族を知る作業を行いました。不安が強い場合、家族は『もし～じゃなかったら』、『もし～と言われたら』など、いろいろ予想しながら面接に臨みます。歯科の待合室で、磨き方が悪いって言われるだろうなあ、他にも治療が必要な歯があると言われたらどうしよう、抜いたら痛いだろうなあ等々、不安とともに順番を待った経験があたりだろうと思います。不安のせいで、残りの大部分の健康な歯のことなんてどこかにすっこんでいます。

また怒りが強い家族だと、『自分の苦しみなどわかるはずがない』、『どうせ自分のことを責めるのだろう、悪いのは～なのに』と身構えています。その予想通りのコースにボールがきたら、『ほら、見たことか！！』と思いきりひっぱたいたくのは至極当然でしょう。

“予想に違わず”には、未知との遭遇がない安心感はあっても、新しい問題の理解も新しい解決努力もありません。

従来通り、無変化です。逆に、予想もしていなかったことに出会ったらどうでしょう。確かに最初は戸惑うでしょう。ですが、問題とされた行動を解決のための努力とねぎらわれ、思いもしなかった自分たち家族の強みを指摘され、この状況でよくやっている、それどころか既になんとかなりつつあると、根拠をもって示されたら…。

虫歯の治療中に歯茎をほめられるところの話ではありません。一瞬混乱し、立ち止まり、そして考えます。そこが、変化への入り口です。なにかを問題として固めていた仮説が揺れ始めます。疑念や驚きや期待などさまざまなものが沸き起こり、そこからたくさんの質問が生まれます。「え？なに？それ、どういうこと？」。その一つ一つが腑に落ちて行くと、固定化していた家族の相互交流にも変化が生まれます。

尋ねたいのは援助者だって同じです。『こんなにもたいへんな状況の中 で、いったいどうやってこの程度のことですまされたのか』、『そもそも、どうしてこんなアイデアを思いついたのか』等、ぜひとも知りたいところです。こうした家族の枠の外でやり取りをすると、面接の場だけでなく、家族どうにも新たな相互作用が生まれます。そしてそれは、社会や人生に対する思い込みや決めつけ、生きてきた枠組みにも変化を及ぼすかもしれません。

ちょうどきりがいいので、「家族を知る」を終えたところで二度目の長い休憩を取ります。次は、「家族を見立て、手立てを考える」作業です。では、3ヶ月後にお会いしましょう」。

誌上ひとりワークショップ (後編)

～家族援助は街のアパレル～

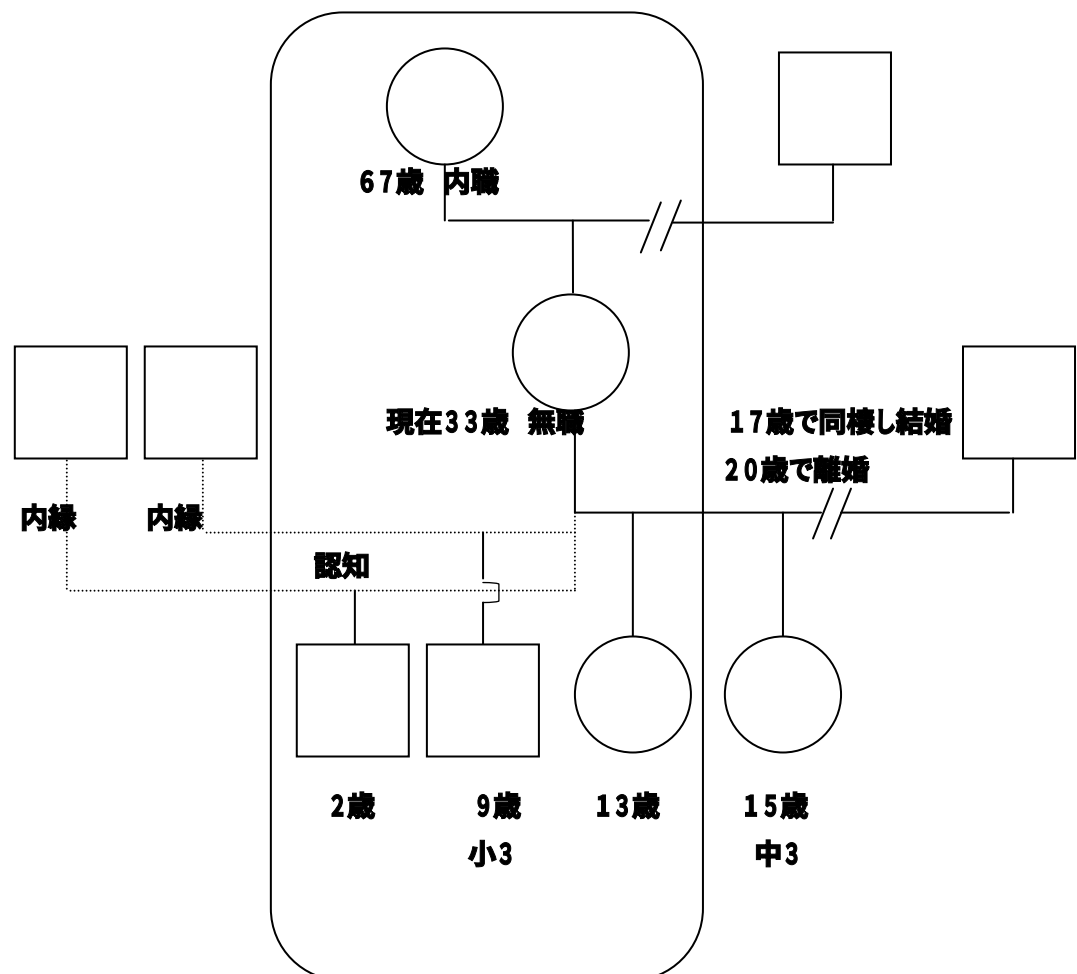
岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

「誌上ひとりワークショップ」の第3回目です。前編はジェノグラムを通して「家族を読む」作業、中編は「家族を知る」作業でした。今回は、「家族を見立てる」手順をすすめていきます。

例によって、検討用に作成した事例の紹介からスタートさせていただきます。家族は数ヶ月前のままですから、読み飛ばしていただいてけっこうです。

演習事例の家族関係図(図1)



主役は、28歳の男性 A の部屋で、二人でシンナーを吸引しているところを警察に補導された15歳中3の女兒です。Aとは結婚の約束をしているといいます。本児はやせていておとなしく、影が薄い感じ。頭痛や不眠を訴えるも幻覚・妄想は認めていません。食事は極めて小食。一時保護中の検査では、知的に軽度の障害がありました。

母は広島県で生まれ、小1のとき母方祖父母が離婚、祖母に引き取られました。母も、小学校時代から万引き・深夜徘徊で何度か児童相談所に一時保護されています。中学1年で家出し、臨県に住む祖父のところへ転がり込み、そちらの中学校に転校しました。高校在学中に、暴力団関係者を自称する本児の実父と知り合って同棲し、高校は中退しました。18歳のとき、本児を妊娠して出産。妹を出産直後に実父と別れ、祖母を頼って広島県に戻りました。祖父母からすれば、晴天の霹靂です。それ以降、本児の実父・祖父とは音信不通です。

翌年、母は二番目の男性と付き合いようになり、毎日足繁く通います。子育てはせず、本児や妹の世話は祖母がしました。本児は、この男性が父親だと思っていたようです。この男性はアルコールが入ると乱暴になりますが、本児に暴力をふるったことはありません。

祖母は母とは言い争いをしても、孫たちにはやさしかったようです。やがて二番目の男性との間に男児が生まれるも認知してもらえず、男とは疎遠になりました。母は異父弟を引き取り、祖母に託しました。

このころから徐々に本児が不安定となり、小1半ばには、徘徊・ケンカ・盗み等を頻発するようになりました。母はあいかわずふらふらと家を空け、学校との連絡はすべて祖母がしていました。当時、本児は『母親とはそういうもの』と思っていたようです。収入は祖母の内職と児童手当で、ギリギリの生活でした。

その後、母は出会い系サイトで知り合った三番目の男性と交際を始めます。そして本児が小6のとき、その男性が住む神奈川県に引っ越しました。本児としては卒業まで祖母宅にいたかったのですが、妹弟が行くというので従いました。

母はその男性とは同居せず、近くに住んで生活保護を受けました。男性は訪問販売をして全国を転々とする生活で、不在がちでした。

本児は、この男性を極端に嫌いました。二人きりになることを極端に避け、母親が不在の夜には夜遅くまで徘徊しました。家出・リストカット・怠学等により、神奈川県の児童相談所に一時保護されこともあります。しかし、児童相談所ではほとんど胸の内を語っていません。このときは、母が男性と別れることを条件に家庭引き取りとなっています。

やがて第4子(男児)を産みましたが、男性が帰ってこないため広島に戻り、また祖母のもとに転がり込みました。神奈川県での2年近くは、実質、次女が異父弟たちのめんどうをみていました。

広島でも、子どもが多く体調もよくないと生活保護を受けました。あいかわず母はふらふらと落ち着かず、子育ての中心は祖母でした。家の中はごみが散乱していて足の踏み場もない状態です。なお、母と三番目の男性との関係は現在も切れておらず、ときどきあっているようです。あるとき、本児が男性と別れてほしいと頼んだところ、「そんなことを言うならあんたの面倒見ない」と言われ諦めたとのことでした。

本児は弟たちにきつくあたることはしませんが、面倒を見ることもほとんどありません。それに対し次女は、言葉遣いや行動が荒々しく異父弟たちにきつくあたりますが、面倒はよくみます。次女には補導歴はありません。本児と次女の関係は悪く、いつもいがみあっています。

広島でも夜間徘徊をしているところを補導され、一時保護されました。家庭引き取りとなったものの中学校に溶け込めず、不登校状態となりました。そのころ退学傾向のBと仲良くなり、Bの遊び仲間Aと知り合います。Aは無職で、過去に恐喝や詐欺で2度刑務所に入っています。

やがてAから告白されて受け入れ、Aの家に入り浸るようになります。学校は、A宅からときどき登校する状況でした。母はこのことに無関心で、学校もAとのことは把握していませんでした。

やがてAは、母に対し本児と一緒に住みたいと申し入れます。母は『本児がそれを望み、Aが定職に就くならよい』と返答しました。しかしAは仕事をせず生活保護を受け、昼間からシンナーを吸引してフラフラするありさまでした。

本児は一緒に住むようになって、Aのシンナー依存の状況にショックを受けました。そして、自分が頑張るとめなければAは死んでしまうと考え、説得したりシンナーを隠したり必死を努力しました。しかし、Aは思いとどまるどころか一緒に吸いながらセックスをしようとしつこく誘うばかりで、ついに好奇心に負けてしまいました。本児はシンナーを吸うことにためらいながらも、嫌われたくない、帰るところもない、という思いで同棲を続けていたようです。

あるとき、近所の住民からの通報でAの部屋に警察が踏み込みました。Aは現行犯で逮捕、本児は家庭裁判所送致となりました。この後、本児は初めて三番目の男性からレイプ被害を受けていたことを調査官に打ち明けました。

7. 家族の問題理解・仮説を見立てる

「ここからいよいよ見立てに入ります。問題を理解して仮説を立てるのは援助者だけではありません。というより、家族の方が先に見立てています。それはとても貴重な情報となりますが、そう簡単には語ってくれるものではありません。

これまでの手順は、家族に見立てを披露してもらうためにも欠かせないプロセスでした。不安や怒りを受け止め解決努力をねぎらってくれたのだから、仮説だって真摯に受け止めてくれるはずと家族は期待するでしょう。そして、通り一遍ではない深い物語を打ち明けようという気持ちに傾いてくれるわけです、おそらく。

家族のよっては、問題の解決以上に自分の仮説への賛同を望んでいたりします。でも、こればかりは無条件に受け入れるわけにはいきません。なにしろ、問題の根幹をなしている部分ですから。

それは後の話として、まずみなさんに『本児は、いま起きていることをどのように理解しているか』を考えてもらいます。本児になったつもりで、この家で育ち、そこを出て、Aと生活するにいたった物語を組み立ててください」。

(各班の意見を報告)

「はい、ありがとうございました。みんなで一緒にこの家族をみてきても、班によってずいぶん感じ方が違うんですね。この場で、あなたの人生はこんな風に何通りにも見えるんだって、彼女に聞かせてあげたい気がします。

さて、わたしは次のように見立てました。

表7 本児の問題理解・仮説

いつも子どものそばにいて、自分を犠牲にしても子どもを守るのが母親だと思う。自分の母は、ずっと好き放題をして生きてきた。あの人の心には、子どもは住んでいない。

母は好きじゃない。むしろ嫌い。けど、憎いのとは違う。そんなものかなって思うだけ。家族は愛し合うものと思うけど、うちは違う。自分は母みたいになりたくないから、家を出た。このままだと、母と同じになる気がして…。

Aといると、いろんなことを忘れられる。Aとはお互いに頼りあえる関係、こんなのは初めて。だから嫌われたくない、好きでいたい。こんな気持ちを家族に抱いたことがない。

Aとの関係は命がけで守るつもり。Aとのことは、自分がしっかりすることで乗り越えられる。こういうのが家族であり、人と人の付き合いだと思う。

間違わないでください、私にはそう見えるということであって、所詮、推測ですから」。

8. 家族の枠(人生観・信念)を感じ取る

「前にも言いましたが、わたしたちが“問題行動”と呼ぶものには、家族の解決努力という側面があります。今回のことだって、あきらかに逸脱的な行動で診断的には素行障害ということになるのだけど、本児にしてみれば『家族とはなにか、人を愛するとはどういうことか』を追求する営みです。

Aへの傾斜は家族から距離を置き、家族に変わる支えを求めた必然の結果であり、シンナーとの妥協はレイプ環境に比べたら比較にならない選択だったでしょう。こういった行動選択の背景には、本児が生きてきた枠組み・人生観が横たわっています。

この枠が面接で語られることは、めったにありません。わたしたち子どもの精神科領域では、特にそうです。枠は、基本的に援助者が感じ取るものだと思います。アンダーウェアですから、見せてくださいというものじゃない。

枠は人生観・社会観・生活信条などが混ざったものですが、総論が枠でさきほどの仮説が各論と考えればわかりやすいかもしれません。さて、彼女はどんな枠組みで生きているのか、そこを感じとりましょう。これは短くまとめたほうがいいですね。どうぞ、ゆっくり時間をかけて話し合ってください」。

「」。

(各班の報告を聴く)

「難しかったですか？先の問題理解・仮説以上に隠れていますからね。何度も言いますが、正解なんてわかりません。当の本人にさえ分からないかもしれない。私たちひとりひとりが、彼女のことをどう感じているか、そこに行き着くと思います。わたしは、次のように感じました」。

表8 本児の枠組み

母親は身勝手だし、兄弟はバラバラ。自分の家族は、家族とは言えない。そうである以上、家族をあてにせず自分が強くなって道を切り開いて生きるしかない。
--

「“家族をあてにてはいけない”は家族への恨みや絶望ではなく、自分に言い聞かせる叱咤激励です。彼女の半生から導かれた、この年齢にしては途方もなく重い枠です。基本的に、援助者がどうこうできるものではないでしょう。ただ、もしいまここにある問題を納得のいく形で乗り越えるたら、その結果、背後の枠も変わる可能性はあると思います」。

9 仮説を置き換えて再構成する(図2)

「見立てが終わったら、いよいよ具体的な援助です。目の前にいる人が着用しているシャツ＝問題理解・仮説について、援助者なりのアイディアを出さねばなりません。新しいシャツをすすめるか、今着ているシャツを生かす方向でいくか、仕立屋の判断のしどころです。私は、『お客のシャツを新調するとしたらどんなデザインになるだろう』から入る医療モデル的なクセを持っています。

先ほども言いましたように、お客は愛着のある自分シャツを仕立屋が評価してくれるものと期待しています。そこに

シャツの新調をすすめられたら、強く抵抗するのは当然でしょう。その気持ちに整理をつるのは、仕立屋のセンス、援助者の専門性への信頼以外にありません。

こうした専門性をもった職種の末尾にはたいてい師・官・司といった文字が着いていて、診断・治療とか指導・教育を行います。彼らは、根拠を持って自分の考えを推し進めます。



ところが、われわれの領域には医療・教育のような目に見える専門性はありません。家族の物語の専門家は家族に他ならないからです。そこで、家族の仮説をこちらのものに置き換えるために、図2のような手順を踏みます。

まず家族の「〇〇が問題」という仮説を受け入れず、「いいえ、わたしは問題は△△だと思います」と援助者の説を説明します。あわせて具体的に解決策を提案し、心理教育的に伝えます。もしそれらが家族の腑に落ちると、新しい解決策が実行に移されるというわけです。

そうすると家族の新しい相互作用が生まれ、家族システムは変化していきます。もしかしたら、家族の枠も変わるかもしれません。しかし、家族の腑に落ちなければなにも始まりません。

思うに、心の領域では仮説の多くは人間関係のもつれをもって組み立てられています。虐待や養育困難だったら親子の関係、離婚や別居であれば夫婦の関係、学校不適應なら教師や友人との関係、のように。この人間関係原因説は、信頼とか愛情といった情緒的かつ主観的で当事者にしか分からない要素からなっています。

自分にしか分からないと思っているところに別の説を提示するのですから、似た仮説での置き換えは難しいです。思いもよらないほうが、かえって腑に落ちやすい気がします。わたしはよく、「人間関係が原因」説を「コミュニケーションが原因」説に置き換えます。家族のコミュニケーションがうまくいってないから、結果として不信や誤解が生まれるのだという理屈です。

情緒的なものを排した目新しさと、明日を描くノウハウ満載の解決策をセットにします。そんなことなら自分にもできそう、そう思ってもらえたら大成功です。その際の言い回しを、表9にあげてみました」。

表9 よく使う言い回し

『そのときは、どんなふうに言いましたか？』
『もしまた同じようなことがあったとして、同じようなことを言ったらどうなるでしょうか？』
『じゃあ、今までと違ってこんな言い方をしたらどうなるでしょう？』
『試しに、私があなたに言ってみますね。どうです？どんな風に感じましたか？これまでと、どこが違っていましたか？』
『次にチャンスがあったら、いまの言い方を試してみませんか』
『ほかにもこの種のツボがいろいろあるのですが、そういったコミュニケーション・スキルを学んでみませんか』
『あなたの力がアップすれば、相手も変わると思います。スキルアップって、伝染するんです』
『さっそくやってみられたんですか。すごいですね、で、いかがでしたか？』
『それは予想以上の変化です。なにか、ご自分で工夫されましたか？』

とりあえず試してみるノリがいいと思います」。

「そうだ、ちょっと各班でやってみましょうか。表9をみながら、本児と心理教育的なコミュニケーション・スキルに関するやりとりをちょっと経験してみてください。そして、実際の感想を話し合ってください」

(各班の報告を聴く)

「ちょうどいい時間になりましたね。では、今回はここで終わって、次回は本児と面接をするとしたらこんな感じかな、みたいな話から始めようと思います。」

誌上ひとりワークショップ

(その4)

～家族援助は街のアパレル～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

「前回(後編)の最後は、家族が抱えている問題理解をコミュニケーション・スキル説で置き換えるという話でした。今回(その4, 後編の続き)はその続きで、「たとえばこんな感じ」という一例から始めます」。

.....

本児:うちの母親みたいなのって、世の中にいないでしょ？

援助者:キミの友達のお母さんはぜんぜん違ってた？

本児:あたりまえよ、あんなのいるわけがない。

援助者:それを、実際にお母さんに言ったことがあるの？

本児:そんなの無駄！言っても通じらんだったら、とうの昔にそうしてる。聞く耳持たないっていうか、そんな会話自体が無理。

援助者:お母さんのことを話題にするのは無理だとして、あなたたちのことはどう？

本児:Aとのこと？どうでもいいのと違う？あの人は自分以外に関心がないから。

援助者:でもAさんのところに行って、一緒に住むんだったら仕事に就くように言いに行っただけじゃなかった？

本児:ああ、あれは自分が面倒なことにまきこまれたくなかったから、たぶん。

援助者:たぶん？もともとどんなやりとりがあって、お母さんが行ったの？

本児:Aが働いてないとわかっていきなり怒り出して、その勢いで乗り込んでいった。わたし頼んだわけじゃないのに。

援助者:怒ったんだ。それ、余計なことだった？

本児:いや、そんなことはないけど。私だってAに働いてほしかったし。

援助者:お母さんが言いに行っただけで知って、どんな気持ちになった？

本児:驚いた。自分以外にも関心があったんだ、みたいな。。

援助者:けっこううれしかった？

本児:うん、まあ。

援助者:ありがとう、って言った？

本児:え？言うわけがない。頼んだわけでもないのに。

援助者:そうかな。たとえばだけど、ありがとうと言ったとするよ、そしたらお母さんはどうするだろう？

本児:ぽか～んとする、きっと。だって、そんなのお互いに言ったことないから。

援助者:そうよね。さっきの話もそうだけど、言葉にしないで「きっとそうだ」って思い込んで、それを10年以上続けたてきたんだものね。その結果、いまの家族ができたわけで、いまみたいな思っているけど口にできなかったことをきちん

と言うやりとりをしたら、ぜんぜん違う家族になるんじゃないだろうか。人と人の関係って、相性とかじゃなくてコミュニケーションの仕方であって決まってくるんだから。

本児：コミュニケーション？なに、それ。

援助者：たとえば、キミがお母さんだったとして、「お母さん、行ってくれてありがとう」と言われたらどう？

本児：びっくりする、行ってよかったと思ってうれしい気持ちになる。もう一回、言いに行くかも。

援助者：そうだよね。そしたら、Aもお母さんの迫力から本気を感じるだろ？それでシンナーをやめることにはならなくても、でも圧力というかしがらみ、わかる？（うん）、キミの後ろ盾を感じることはなるよ。家族って、そういうことじゃないかな。特別な何かをしなくても、いつも後ろにいてくれる存在。

本児：後ろにいるだけでいいの？

援助者：そうそう。誰かを好きになるということは、その人の考え方や家族など全部ぶっ込みで好きになるってことだから。Aがキミの後ろに家族を感じたら、キミには家族があるってことになると思う。

本児：家族は後ろにいる、ということ？

援助者：いい表現だね。そう、その通り。後ろにいと、それほどどうとうしく感じないよね。別に特別なことをするんじゃなくて、＜ありがとう＞みたいに思ってることを口にするだけで、背景に収まっていくのと違うかなあ。ほかに、そんなコミュニケーションのツボがあるけど、習ってないんだらうね？

本児：そういうのって、習うもの？

援助者：そうだよ、大人をまねて身につけるもの。どう？先生からコツを盗んでみる気はない？

.....

「もちろん、実際はこんなふうにはスムーズにはいかないけど、『家族＝人間関係』を『家族＝コミュニケーションの仕方』に置き換えました。彼女は、家族は血と愛と信頼でつながっていると思い込んでいるけど、これだと家族なんて現実味のない夢になってしまいます。コミュニケーション次第で家族は変わると腑に落ちたら、『それならなんとかできるかも』と思えるでしょう？

会場に、それって本当？と思った人がいるでしょう？私はその人に、じゃあ何が本当なのか、あなたは どうやって決めるの？って聞き返します。なんとかなりそう、そう思えたらどうにでもなるんです。どうにもならないと思ったら、何も起きません。それが、対人援助のキモでしょ。

変化の入り口は好奇心です。『どういうこと？もっと説明して』と質問が飛んでくること。どうしてこのワークショップがジェノグラムからはじまったか？もう気付いたでしょ？あれによってかき立てられた家族への好奇心が、後に続く対人援助へ好奇心の原動力だったわけです。

実際的にも、コミュニケーションのスキルアップというテーマは愛と信頼の回復というテーマに比べるとずっとハードルが低いです。こっちは目に見えるものだし、一人でもできますから。人と人とのつながり方を練習しながら緩く試行するという設定自体が、想像を超えた世界ではないでしょうか。

本児にとっては過去よりも未来の方が圧倒的に長いわけで、この援助指針はそこに重きを置きます。心理教育的なサポートで、新しいコミュニケーション・スキルを身につけて新しい関係を築き、新しい生き方をできるように援助するわけです」。

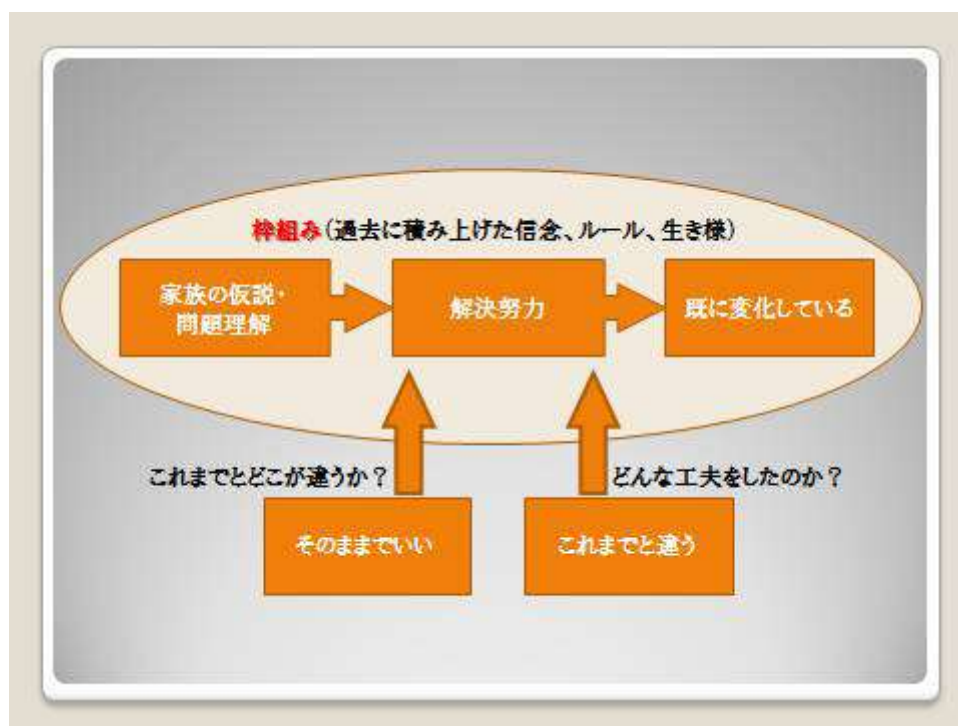
10. もう一つの手順：既にある変化から問題理解・仮説を再構成する（図3）

「次は、シャツのリフォームの手順です。仮説を用意し自信を持って家族に提示しても受け入れてもらえない、そういう状況に出くわすことは珍しくありません。というより、その方が多いでしょう。ある意味、家族は自分の問題理解・仮説を拠り所にしていてますから。そこをおろそかにしては、忽ち家族援助は立ちゆかなくなります。

置き換えが難しかったら仮説“全体”をどうこうするのではなく、仮説の“部分”に目を向けます。いまのシャツでコー

ディネートを考える感じでしょうか。そのまま生かせるところをとりあげます。既にある変化を見つけ、『これまでと違う』『すでに変わりつつある』という脈絡が生まれるような質問を發します。このあたりは、心理教育とは好対照です。これまでのワークで脆弱性の陰に隠れた強みを見つけましたが、あの視点があれば“たまたまのマシ”が“既にできている証し”として生きてくるでしょう。

図3 問題の解決志向的再構成



先の置き換えでは用意した仮説の「思いがけない目新しさ」がカギを握っていましたが、解決志向的な支援では「思いもしなかった驚き」がポイントになります。自分ではうまくできていないとスルーしていた部分が、既に起きている変化だったりいつもと違っているところだったりするわけですから、新鮮な予想外・想定外でなければなりません。

ただし、あまりにも予想とかけ離れていたら意味不明となってしまいます。枠の外ギリギリ、サッカーでいえばゴールポストやクロスバーの外スレスレくらいがちょうどいいでしょう。面接の手順をまとめると、次のようになります」。

- ① 援助対象者の問題理解・仮説や解決努力の中に既に起きている変化（マシ、これまでとの違い）を見つける。
- ② それらの間に脈絡が生まれるような質問をする。
- ③ 「なんとか対処できている自分」への肯定感を育む。
- ④ 新しい自分の問題理解・仮説、新しい家族間の相互作用が生まれる。
- ⑤ 結果として、家族の枠組みも変わることを期待する。

「枠の内外と言ってもピンと来ないと思いますので、自分たちの枠をちょっと体験してみましょう。手がかりは、本児の問題理解のストーリーです。これを起承転結と見ます。まず、「そもそも、問題はここから始まった」とする“起”ですね。それをうけて、“承”は「それに関連して、さらに～」とたたみかけます。そこから少し話を広げて、「その一方で～」的な“転”が入ります。そして最後は、「結局～」とまとめる“結”です。

このようなストーリーを聞いて、わたしたちは援助者としてどのように応えるでしょう。それをいまから経験しましょう。まずグループで、本児の役を決めます。その人は、見本のストーリーの4パートをおおまかに頭に入れておいてください。グループの他の人は、みんな援助者であり観察者です。

本児役の人は、最初の援助者に向けて“起”を語ってください。自分なりの味付けで、話を膨らませてけっこうです。全体として2、3分くらいのところで止めて、それぞれの役の人がグループ内でフィードバックします。本児役の人から「そう言ってもらえることを期待していた」「予想通りの反応に安心した」みたいな感想がでたら、それはゴールの内側ということになります。

援助者が交代して、次々“起”の部分で短いやりとりをしてください。もしも「思いがけないことを言われて驚いた」「予想外のやりとりになって戸惑ったけど、なるほどと思った」といったフィードバックがあったら、ゴールポストのギリギリ外側ということになります。外側を狙うのじゃなくて、いろんなひとが思うことを自然に口にしてください。それを、本児役がどう感じたかに耳を傾けましょう。誰かがフィードバックを記録しておくといいでしょう。後で、やってもらうときに役立つかもしれません。

この後、同じように“承”の部分、“転”の部分、“結”の部分と続けていきます。自然でいいです、無理してひねることはありません。本児役の枠を知り、自分の枠を意識し、他の援助者役の枠を感じられたらいいですね。本児の役の人、意外・想定外・予想外に驚かされながら、自分自身の枠を知ることができるでしょう。そのあたりに注意しながら、じっくり体験してみてください。

今回は、“起”の部分だけをやりましょう。“承”以降は、次回以降にまわします。

(ア) 仮説“起”の部分から

「どうですか？難しい？そうでしょうね。普通、援助面接ではゴールポストの外側なんて意識しませんものね。じゃあAグループから、本児役と援助者役、前に出てもらえますか？本児役から、“起”の部分のまま言ってもいいし、流れで少々膨らませてもいいから口火を切ってください。どうぞ。

本児役：母親って、いつも子どものそばにいて、自分を犠牲にしても子どもを守るものでしょ？違いますか？でもうちの母親は、ずっと好き放題をして生きてきたんです。あの人の目には子どもなんて映ってません。

援助者役：そうか、ずっと寂しかったんだね。

本児役：いいえ、母が恋しかったらそうかもしれませんが、恋しくないから寂しくなんかありません。

援助者役：そうか、なるほど。でも、悔しかったりはしない？

本児役：そりゃ、悔しいし腹が立ちますよ。

援助者役：それでも、長女として弱音を吐くこともできず、苦しかったでしょうね。よくここまで耐えてきたね。

(拍手)

私：ありがとうございました。まず、本児役の方にうかがいます、どんな感じでしたか？

本児役：寂しかったんだねって言われたとき、なんかムツとしました。そんなふうに簡単に言って欲しくないと思って。自分の気持ちがわかるはずがない！って。でも、苦しかったでしょうと言われたときはなぜかうれしかったです。正直、ほっとしました

私：寂しさで悔しさ、悔しさなら認められる！

本児役：そうか、そういうことだったんだ。

私：どっちも抱えていそうだな。援助者役の方、どうでした？

援助者役：できるだけ自然な面接をしようと思いました。自分的には、普段と変わらない気持ちでできたと思います。

私：本児役と話をして何か？

援助者役:寂しかったんだね、は真ん中過ぎたんですね。

私:全体的にデッドゼロっつうか、ど真ん中でしたね。本児役が言われたように、真ん中だからこそその反発もあったけど、期待通りの共感にほっとしたようです。しんどさだけでなく、耐えてきた頑張りまで分かってもらえたのですから、味方になってくれるかもしれないとの期待を持ったかもしれません。

この流れで突き進むと、自分の問題理解・仮説も肯定してくれると確信しても不思議じゃないですね。でも家出・同棲という行動選択の話になると、受容や共感だけではどうにもなりません。その辺りの距離感はいつも意識しておかないといけませんでしょう。

もしも援助者との間で「ひどい母親対可愛そうな子ども」で合意ができてしまうと、今後もずっとこの対比でストーリーに肉付けされていきます。結果として依存対象がAから援助者に移っただけ、となるとしんどいです。

あまりにど真ん中が続くと、やがては『ほんとうに話を聞くだけで、自分の辛さがわかってるのだろうか』、『調子のいい言葉を口にするだけで、どうしたらいいかは全然言ってくれない』との不満も出かねません。難しいところです。

さて、Aグループの本児役の方にお伺いしますが、予想外で驚いた、意外な言葉が新鮮だった、想定外で戸惑った、そんなやりとりはありませんでしたか？全然なし？それじゃあ、本児役をやってもらえますか？こんなのはどうでしょう？

本児役:いつも子どものそばにいて、自分を犠牲にしてでも子どもを守るのが母親じゃないですか。そうでしょ？でも、私の母は全然違うんです。あの人はしたい放題、好き勝手をして生きてきたんです。あの人の心には、わたしなんか、いや子どもは誰も住んでません。

私:そうか、そんなふうに感じながら大きくなったんだ。哀しい話だなあ。聞いているだけでも辛い。

本児役:でしょ？

私:それにしても、キミのお母さんって不思議な人だよな。そうやって好き勝手してたけど、自分の産んだ子どもは絶対に手放さなかったでしょ？好きだった男性であっても決して子どもは任せなかった。自分が育てる自信はなくても、投げ出さずにおばあちゃんに頭を下げて委ねたわけでしょ。おばちゃんに対しては複雑な思いもあっただろうにね。

本児役:えっ？？先生は、そういうのも母性だって言いたいんですか？

私:それが母性かどうかはわからない。ただ、この緩い繋がりがお母さんの特徴なのかなって気はするけど。

(拍手)

私:どう？どんな感じだった？

本児役:思いもしないことだったのでピンとこなくて、えっ、どういう意味？って感じです。もっと詳しく聞いてみたかったです。

私:ゴールのギリギリ外をねらったつもりだったので、あなたに驚いたり戸惑ったりしてほしかったんです。そこから興味とか好奇心が湧いて、もっと聞いてみたいとなるとうれしい限りです。ほんとに、打ち合わせたような感想をどうもありがとう。

本児役だって、すぐにはピンと来ないでしょう。でも嘘は入っていないから、「なるほど、言われてみれば」となるんじゃないでしょうか。「確かに、兄弟は誰も施設に預けられなかった。自分も一時保護されたけど、施設入所の話はなかった気がする。自分で育てることはなかったにしても、施設や父親に預けることは考えなかった人なんだ」と思い至れば、少くくは仮説が揺れるかもしれない。

これは、家族の“そのままでいい”ところ、強みです。「うちの母親も家族も最低！」という仮説のベースになっている「どうせ、いまさら」の枠組に、小さなクラックがはいるかもしれません。もちろん、入らないかもしれませんが。

「さて、予定通りです。きりもいいし、ここで今回は終わります。またお会いしましょう」。

誌上ひとりワークショップ

(その5)

～家族援助は街のアパレル～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

「さて、今回は問題の仮説はその人なりの枠組の中で組み立てられているという話から、「枠のギリギリ外」というテーマに実習をしました。そのことが、援助者としての自分自身の枠を知り、広げることにもつながる、そういう意図でした。今回は、本児の仮説ストーリーの“承”の部分を手がかりにします。では、Bグループのお二人、前でお願ひできますか？」。

本児役：母は嫌い。けど、憎くいとは思っていない。なんだろう、この違い、先生、わかる？

援助者役：憎いと思うほど、深い気持ちじゃないってことかな？

本児役：その意味もよくわからない。だいたい大人って、自分のことしか考えていない、違う？けどね、わたしは絶対に母みたいな大人にはならない。あんな人生なら、生まれてこない方がマシだと思う！

援助者役：そうかあ、そこまで思っていたんだ。

本児役：あの人の近くにいとだんだん似てきそうで怖い。ほんとよ！だから家を出た…。

援助者役：お母さんと離れたら、違う生き方ができる気がしたんだね。

本児役：そう、わかるでしょ？

援助者役：気持ちは分からないくはないけど、でもいま起きているのはそういう単純な話じゃないだろ。

(拍手)

私：まだまだ続く様子だったけど、一応ここまでにしましょう。いかがでした？

本児役：はじめは、親身になって話を聞いてくれる感じで安心感がありました。味方だって気がしました。

私：もしかしたら、家出・同棲も理解してくれるんじゃないかって気がした？

本児役：そうです、そうです。期待しました。

私：それで？

本児役：ところが、しれっと“そういう単純な話じゃない”なんて言われてガックリ。だれも単純だなんて思っていないし、ムカついてやり返そうとしたらストップかけられちゃいました。

援助者役：彼女のゴールのど真ん中に吸い寄せられてしまって、あわててしまいました。

私：わかるな、その感じ！他の方、見ていてどうでしたか？

参加者：母親から離れるだけなら、一時保護所に逃れることもできたはずだけど…。

援助者役：そんなことを考える余裕がありませんでした。

私:どうなの、一時保護について。

本児役:絶対に行かないと思います。母親から離れることは家出理由の半分で、彼のところに行きたいというのが残りの半分だと思うから。

私:援助者の話は彼女からすればだいたい予想の範囲内だったからか、子どもの方は全然揺れている感じがなかったですね。

「グループでは子ども役が揺れたらしいけど、披露してもらっていいですか？」

本児役:母は嫌いだけど、憎いのとはちょっと違う。親なんて、そんなものじゃないかなって思うだけ。でもね、わたしは絶対に母みたいにはなりたくない。だから家を出たの。だって、このまま一緒に住んでいたら、母と同じになる気がするから。

援助者役:嫌いだけど憎いのとは違うって、具体的にどんな気持ちなんだろう？

本児役:うまくいえない..

援助者役:じゃあさあ、お母さんとは違う生き方って、どういうイメージかな？

本児役:え〜と、ちゃんとした家庭をもって..

援助者役:ちゃんとした？

本児役:そんなこと、わかるわけない！

(拍手)

私:子ども役はどんなふうに揺れたのですか？

本児役:気持ちを聞かれて驚きました。嫌いだけど憎くないってのを、具体的に言えと言われて、あわてて自分の気持ちを見つめてみました。結局、うまく説明できませんでしたけど。

私:そんなに深く考えて使った言葉じゃなかったのに？

本児役:そうですね、言葉が先行していたところに、あわてて気持ちを追いつかせる感じかな。

私:うまい表現ですね。大事なところだけど、子どもにとっては答えにくい質問だったかもしれないね。本児役にしたら、それくらい自分で考えろよ、あんた専門家だろ！みたいな(笑)。

本児役:そうですよ。その反面、わかってたまるかという思いも..。

援助者役:複雑だったんですね。軽く尋ねたんですけど。

本児役:重いネタを軽く聞くな！

私:いいツッコミですね。で、援助者は母への思いを聞き出せたら、その後は？

援助者役:もちろん共感して、そのあたりをていねいにやっていこうと。

本児役:共感してほしい気持ちは強いです。

援助者役:それで信頼関係を築けたら、Aとのことに踏み込めるかなと。

本児役:そこは透けて見えました。

私:子どもはしたたかで、それほど揺れてなかったような..。

援助者役:ほんと、そうですね。

私:この家出・同棲って、母みたいにならないための本児の解決努力そのものでしょ。援助者として容認はできないけど、ねぎらうのは可能だよな。「すごく大きな決断だったろうね、誰にも相談できずしんどかったね、迷いもあったと思うけどどうやって振り切ったの？」とか。その後でなら、「離れてみて母と違う生き様という実感はあるの？」とか、「あんまり変わらないなって思うのはどんなところ？」とか、「家を出る前の予想と比べてどう？」とか。それなら、粹ギリギリかな？

本児役:う〜ん、頭が混乱してきました。

私:たとえば、こんなのはどうでしょうか？もう一回、本児役でつきあってもらえますか？

本児役:母は嫌いだけど、憎いのとはちょっと違う。うまく言えないけど、ほら、親なんてその程度のものじゃないですか。

私:キミの友達は、だいたいそんな感じなの？

本児役:そうですよ。親に期待して痛い目にあった子はいっぱいいます。

私:哀しい話だなあ…。

本児役:先生、わたしは母みたいにはなりたくない。絶対にイヤ。だから家を出たんです。だって、ほら、このままずっと一緒に住んでいたら、母と同じで嫌な大人になる気がするから…。

私:嫌な大人か、その気持ちは分かる気がする。じゃあ、どのくらい離れるのとちょうどいいと思う？“嫌いだけど憎くはない”にじっくりくるのって何キロくらいの距離かな。

本児役:なに、それ？

私:ちょうどいいイヤさ加減をずっと持ち続けることができ、適度なストレスを味わえる距離だよ。どれくらいだろうね？

本児役:ちょっと先生、ちょうどいい嫌いさ加減ってある？適度のストレスって何？意味がわかんないよ、説明して！
(拍手)

私:どうもありがとう。あいまいで主観的な心の距離を、言葉じゃなく実際の距離に置き換えようと思ったんです。“誰のところ”じゃなく、“何キロ離れるか”という距離に。

本児役:わけが分からなくなりました、想定外で。

私:聞かれて混乱し、それが疑問に変わり、質問が沸いてくる、となると狙い通りなんだけど。

本児役:はぐらかされた感はありませんけど、「ちょうどいいイヤさ加減」とか「適度なストレス」とかに気持ちを持って行かれました。

私:ノンアルコールビールじゃないんだから、ストレスフリー・憎しみゼロなんてありえない。無い物ねだりなんかせず、自分にとってちょうどいい愛憎やストレスを保てる距離を探そうってことです。なにしろ、彼女が育ったのは極端な世界ですから、あこがれる家族や愛情もまた極端なものでしょ。有るか無いか良いか悪いか、のゼロとイチだけでできている世界観。もっとあいまいで緩くてぬるい話をしたい。そこから、「え？じゃあ、うちみたいなのも家族の一種？」みたいに。

余談ですが、インテリ落語家だった桂枝雀師匠が「緊張から弛緩への落差が大きければ大きいほど杵は揺れる」みたいな話を書いておられました。動物行動学の小林さんも似たようなことを書いてた気がします。

(ウ) 仮説“転”の部分から

では、次に行きます。本児役はまた交代してください。念のために言いますけど、わざと外を狙わなくていいです。いつもどおり自然にやってください。本児役からゴールポストの内側だったか、それともギリギリ外だったか、それを聞いて確かめるだけです。Dグループ、お願いします。

本児役:Aとなると、どんなことがあっても忘れられる。わたしはAを頼りにしているし、Aだってわたしのことを頼りにしてくれていると思う。信じ合える関係なんて、わたし、初めて。だからAには嫌われたくない。ずっと好きでいたい。

援助者役:なるほど。

本児役:こんな気持ちを家族に抱いたことなんて、ただの一度もないから。さっきも言ったけど、家族のことはとっくに諦めてる。

援助者役：つまり、家族と違ってAさんを信頼してると。

本児役：そうじゃなくて、信頼しあってる。

援助者役：そうか。そんなふうに安心できる場所があるってことは、とても素晴らしいことだね、けど、キミはまだ15歳じゃない？

本児役：15歳だと信頼関係はつくれないということ？

援助者役：いや、違うんだ。成人が15歳と関係を持つと罰せられるんだよ。もちろん、結婚はできないし。知ってた？

本児役：マジ？うっそー！先生を信じてたからいろいろしゃべったのに、もうなにも話さない！

(拍手)

私：どうでしたか？

援助者役：これだけは言うておかないといけないと思って。

私：確かに大事なことです。本児役の方はどうでしたか？

本児役：完璧に予想通りです。淫行という言葉だって知ってましたから。ただここまでよく話をきいてくれたし、もしかしたら自分サイドで聞いてくれるかな、みたいな淡い期待もありました。やっぱりとまさかが半々くらいでしょうか。だから、裏切られた失望や怒りはそれほど大きな物ではないような気がします。やっぱりなあ、くらい…。

私：確かに、自分以外はあてにしないのが彼女の粹だものね。深手を負わないための仕組みというか…。もう別れざるを得ないというリアリティはもっているの？

本児役：はい、彼は逮捕されていて、もう合わせてもらえないだろうと。でも、実家に戻ることはないという強い意志もあります。

私：そうか、想定内だからこれくらい言われてもびくともしない？

本児役：そうですね。気持ちは揺れても決意は動きません。

私：子どもなりに現実を受け止めていたんだね。Eグループ、やってみますか？じゃあ、どうぞ。

本児役：Aというといろんなことを忘れられる、Aとはお互いに頼りあえる関係だから。そんなのは初めて。Aには嫌われたくないし、ずっと好きでいたい。こんな気持ちを家族に抱いたことなんて、ただの一度もない。

援助者役：なるほど、Aさんという人すごく安心できるんだね。Aさんも、まったく同じ気持ちなのかな？

本児役：たぶん、そうだと思う。

援助者役：じゃあキミたち二人は、逮捕とかされることも覚悟の上で安心や信頼を確かめ合っていたの？

本児役：どうだろ、よくわからない。

援助者役：そこがあいまいなら、Aさんの気持ちもあいまいなことじゃないかな？

(拍手)

私：なるほどなあ。本児役の方、いかがですか？

本児役：理詰めで、有無を言わさない感じ。

私：「分かりました」となる可能性は低いにしても、迫力は横から見ても伝わってきましたが。

本児役：はい、上から目線の真剣さは痛いほど感じました。

私：予定調和的に説得と諦めにまとまっていきそうな、難しい話題ですよ。ちょっとやってみようかな、気が進まないけど。

本児役：Aというといろんなことを忘れられる、Aとはお互いに頼りあえる関係だから。そんなのは初めて。Aには嫌われたくないし、ずっと好きでいたい。こんな気持ちを家族に抱いたことなんて、ただの一度もがない。

援助者役：キミはAと心でつながっていたんだね？

本児役：そう、わたしにとってAは家族だから。

援助者役：そうかな？家族って、身体の関係をもたなくても安心して一緒にいれるものだよ。心のつながりだけで、頼ったりあてにしあえるのが家族だと思うけど。

本児役：Aだってそうよ。

援助者役：そう？確かめてみた？

本児役：そんなこと、どうやって確かめるわけ？

援助者役：もし男性が性的なつながりだけを求めているなら、それを拒まれたとき、言葉遣いや思いやりの態度がごろっと変わるから。だったらそれは二セモノ、心はつながってなんかいない。身体関係を拒み続けるだけで、家族になれるかどうか確かめられるんだよ。確かな方法だから、しっかり覚えておいてね。

(拍手)

私：はい、ありがとう。ちょっと意識して心理教育的にやろうとしたんだけど、どうだった？

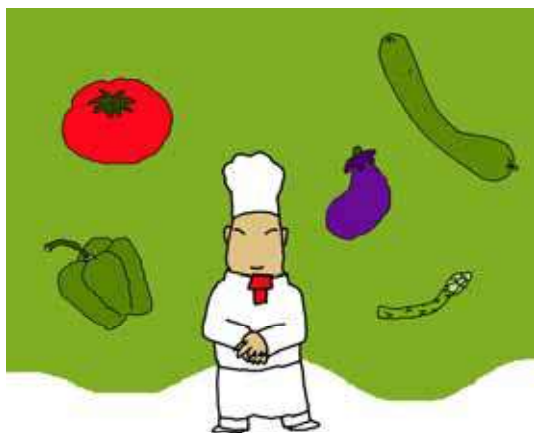
本児役：ど真ん中から説得が始まったという感じではなかったです。試してみる気になってました。

私：そうか。予想外の驚きではなかった？

本児役：心のつながり云々は予想通りでしたが、試し方があるというところは新鮮でした。もしいつか誰かからセックスを迫られる場面があったら、そのときにじわっと効いてくる気がします。

私：そうですか、わたしも参考になりました。

「今回は自分が疲れたので、ここで閉じます。さあ、あと一回です。お互い、頑張りましょう」。



家族援助レシピ

家族の法則 2

岡田隆介 著



このイラストは岡田隆介さんの「家族の法則2」の装丁画を依頼されて作ったもののうち、使用しなかった方のバージョンです。

誌上ひとりワークショップ

(その6)

～家族援助は街のアパレル～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

「最終回です。長かったですね、1年以上ワークをやってきたことになります。ここ3回ほどは、“枠のギリギリ外”というテーマでやってきました。どうでしょうか、援助者としての自分の枠を知り、広げることにつながってきたでしょうか？では前回の続きで、本児の仮説ストーリーの“結”の部分を手がかりにした最終回のスタートです」。

(エ) 仮説“結”の部分

ではまた、本児の役は交替してもらいましょうか。ぐるっと回ってみて、どのグループも全員が次々と援助者をやっていました。みなさん、とても熱心ですね。今回はFグループをお願いします。

本児役：Aとの関係は命がけで守る。何があっても、Aとは離れない。ずっと待たなくてはいけないかもしれないけど、いつかは一緒に住みたい。時間はかかると思う。でも、自分がしっかりしていれば絶対に乗り越えられる。それがぼんとの人との付き合いだ。それで、家族になれる。

援助者役：そんなに好きなの…。で、もし子どもができたとするよね。Aはいい父親になれるだろうか。キミが育った家庭のようにはないと思う？

本児役：わたしがしっかりしていれば、きっとなんとかなる。

援助者役：キミだけがしっかりするだけで乗り越えられる問題だろうか。家族でしょ、家族はお互いに支え合うんじゃない？

本児役：そうだけど…。

援助者役：行き当たりばったの家族なら、結局、お母さんと同じじゃない？身体と心は自分で守らなきゃダメだと思うよ。

本児役：そんなこと、言われなくてもわかってる(泣)。

私：う～ん、子ども役の方、いかがでしたか？

援助者役：完璧に予想通りでした。援助者の意図は丸見えで。

私：話すほどムキになってたね。

援助者役：はい、もう絶対に一緒にになると言わざるをえない気分でした。

私：で、不自由せずに育った人に何が分かるの、に行き着いて、うんざりからイライラを経て爆発・号泣にいたったんですね。援助者役はどうだった？

援助者役：でも、援助者としてよりも人間として止めたかったんです。

私：説得できると？

援助者役：まさか(笑)。

私：たとえ『どうせ大人は…』となっても、『叱ってくれる人もいない』よりはマシだと信じてね？

援助者役：はい。

私：確かに、こういったやりとりではゴールをはずすのはとても難しいですよ。他にありませんか？だいたいみなさん、こんな感じでしたか？じゃあ、ちょっとやってみましょうか。本児が「No！」を完璧に予測しているなら、「Yes!」から入ってみようかな。

本児役：Aとの関係は命がけで守る。Aのことは、自分がしっかりすることで乗り越えられる。それが家族であり、人と人との付き合いだと思う。

私(援助者役)：うん、それは間違っていない。お互いに自分を犠牲にしても相手を守ろうとする、それが家族なんだからね。

本児役：はい。先生、わたしにできると思いますか？

私：キミなら、できるかもね。

本児役：うれしい。頑張ります。

私：うん。で、Aはどうだろう？

本児役：Aだって、たぶん。

私：シンナーのときはどうだった？

本児役：あのときは、自分のことでいっぱいだったから、それで難しかったんだと思う。

私：なるほど。自分のことでいっぱいいっぱい、キミのことを考える余裕がなかった？

本児役：そう。

私：キミだっていっぱいだったけど、それでも相手を大事にしたのにね。キミみたいに命がけで相手を守るつもりなら、シンナーくらい止められたかもって思うけど。

本児役：え？命がけかぁ…。

私：そう、命がけ。

本児役：自信、ない、かなぁ…。

私：どうだったかなあ？

本児役：別れさせる方向は同じですけど、説得されている感じはなかったです。

私：選択を否定されるという予想はありましたか？

本児役：ダメ出しは当然だと思ってます。

私：肯定しながらすすめていったんだけど。

本児役：キミならできるかも、には驚きました。うれしい、よし頑張ろうってところで、Aの話になったのでちょっと混乱し

てしまいました。不思議に反発は起きなかった気がします。

私：意図は同じでも、肯定から入るだけで抵抗は小さくなるでしょ。説得よりも質問のほうが受け入れやすい、これは間違いありません。それから、抽象的観念的な教示よりも具体的行動の“試行”の方がいいでしょう。さきほどのセックスの話のように。この場合は、シンナー断ちの方法をいっしょに考えるのがいいかもしれません。補導中で面接には制約はあるでしょうけど、継続的に会っていきたいケースでした。さて、なにか質問、ありますか？

参加者：枠って、一つだけですか？たくさんあるような気がしますけど

私：はい、おっしゃる通りです。人生観とか主義主張なんてのは、大きな枠ですよ。面接で感じる家族観や仕事観は、ローカルで小さな枠ですね。ほかに世の常識みたいな、その中間くらいの枠もあります。(枠の大きさと縛り具合は関連していますか)。いい質問ですね。どう思われますか？人生観なんて比較的緩い枠じゃないですか？日常的に、自分の主義主張と照らし合わせて判断する場面も、そうめったにあるもんじゃない。対人関係とか適応の難しさを訴える相談で表面化するのは、たいてい家族観とか仕事観です。小さな枠だから、かえって窮屈なんですね、きっと。

参加者：常識との衝突もあるように思いますけど。

私：ええ、世の常識もそこそこ顔を出しますね。ただ、常識自体にある程度の弾力性というか幅があるから、さほど大きな縛りにはならないような気がしますけど、どうでしょう？たとえば、ボクと皆さん方を比べたとき、常識はさほど変わらないでしょうけど、家族観や仕事観には個性があって千差万別です。(じゃあ、家族の小枠を感じ取ればいいのですね)でも、わたしの小枠を感じようとしてもけっこう難しいでしょ。それに対し、わたしの大枠はなんとなく伝わっているんじゃないでしょうか。家族面接においても、それに近いことが起きている気がします。

事例に話を戻しますね。『母親は身勝手だし、兄弟はバラバラ。自分の家族は家族とは呼べない。そうである以上、家族をあてにせず自分が強くなって道を切り開いて生きるしかない』という問題理解・仮説のベースにあるのは、小枠である家族観です。『母みたいな生き方は嫌だ、自分の身は自分で守るしかない、だから家を出る』という行動選択もそうです。けど、この年齢で母親を見切ってAのもとに飛び込む決断を可能にしたのは、彼女の人生観ではないでしょうか。枠の大きさ・縛りはいろいろだけど、リンクしていることは間違いない。

ワークを始めた頃に言ったけど、他人の枠に手突っ込んでそれを変えることはできません。この枠が動くとしたら、それはかつて思いもしなかった想定外の体験の積み重ねでしかないように思います。枠の外側にも世界があると知ったら、母親や家族がいろんな風に見えてきて、“ありえないほどの不運と不幸”な色で塗った自分史を塗り変える日が来るのではないのでしょうか。

11. おわりに

「ほんとに、ほんとに終わりの時間です。いまここで伝えたいのは、“実は、私たちも自分の枠の内側で仕事をしている。家族といっしょに、私たち自身も枠の外にも世界が広がっていることを知ろう”ということです。

最後に、一つの事象を対照的な二つの視点から眺めることを提案したいと思います。左右の目で見ると立体視ができる、左右の耳で聞くから定位しやすい、つまりものごとの奥行きがわかる、そういう意味で絵画の二点透視図法に似ています。

ここまでみなさんと考えてきた「不安と怒り」、「解決努力と問題持続」、「リスクとストレングス」、「変えると変わる」、「枠の内と外」、これらはまさに対照的な二点です(図4)。枠に縛られて窮屈に生きているのは、家族だけじゃない。私たちだって、同じような縛りの中で窮屈に仕事をし、生きているかもしれません。

このワークがきっかけで、2点透視図法的にものごとを眺めるようになって枠の外にも気持ちを向けられたら、そして家族だけでなく自分たちの枠についても考える機会になったとしたら、とてもうれしく思います。延々とおつきあいいただき、ほんとうにありがとうございました」。

図4 2点透視図法による奥行き認識

緊張と緩和の組み合わせ		
感情	表(裏)の顔としての不安	裏(表)の顔としての怒り
解決努力	ねぎらいの対象	問題を持続させる働き
家族要素	脆弱性(リスクファクター)	強み(ストレングス)
家族援助	変える援助	変わるのを支援
手順	心理教育(教える)	質問する、教わる
枠の内外	期待(期待)通り、想定内	予想外、意外、想定外
反応	安心、現状維持	驚き、変化の糸口

52

参考文献

家族が変わる、子育てが変わる、コミュニケーションのヒント 明石書店

誌上ひとりワークショップ

シリーズ2

～家族の交流パターンを変える～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

前号で「誌上一人ワークショップ ～家族援助は街のアパレル～」が終わりました。今回から一人ワークショップの第二シリーズとして、SSTの手法を取り入れたライブ事例検討会をスタートします。また、しばらくおつきあいください。なお、事例はもとの内容に大きく手を加えて創作しています。

1. 導入

「まず簡単に自己紹介をしてもらいます。そして、全員に共通していることや当てはまるものを探してください。見るだけで分かるものとか、あまりに主観的なことはだめですよ」

「なにが見つかりましたか」

「全員、子どもが二人いることが共通していました。Twitter をしていること、docomo の携帯をもっていることも共通しています」

「属性のようなものはなんとなく分かってくるけど、行動特性のようなものは当たりをつけて尋ねないと見つからないでしょ？ということで、ジョイニングをかねて情報の種類と集め方を体験してもらいました」

2. ケースの決定

「今日、ここに10名の方が参加しておられます。みなさんは、全員、対人援助に関連したお仕事をしておられます。これからいろんなケースの話がでてきますが、それらについて一切漏らさないということを知っていただけたらと思います。はい、守秘義務を了承していただきました。ありがとうございます」

「さて、みなさんの胸の内には、いま気になっているケースがきっとあると思います。うまく信頼関係をつくれなとか、どう理解したらいいのかわからないとか、どんな支援ができるか見当がつかないとか。代表的なケースを一つ思い浮かべてください。ではそれを、順番にコンパクトにみんなに紹介して

ください。Cさんからいきますか、どうぞ」

「時間に余裕があれば、すべてをみんなで考えたいのですが、残念ながらそうはいかないので一例だけ選んでください。すべてを聞き終えて、今日、どの話を取り上げるか。話し合っ誰のケースかを決めてください」

「決まりました？ Aさんのケースですか？わかりました。では、Aさんに詳しくそのケースを説明してもらいます。前に出てもらっていいですか？相談内容、家族状況、初回面接の状況、面接の経過、現在の状況、いま心にひっかかっていること等を、30分くらいをお願いします」

3. ケースの概略

① 家族構成：現在は母子二人の生活。

母親：31歳。3年前の離婚を巡るゴタゴタにより、抑うつ的となり精神科クリニックに通院。服薬中。

入院歴はない。離婚後、生活保護を受給（現在も）。中卒後、家出し暴走族グループに入り、仲間宅を泊まり歩いた。その後、デリヘルやスタンド、居酒屋等で働く。本児の父親とはスタンドで働いていたときに知り合う。19歳で同棲、妊娠、結婚。27歳で離婚。その頃に実父が死去したこともあり、祖母と連絡をとるようになった。祖母との日常的なつながりはほとんどない。幼い頃から、短期だった実父の暴力を受けて育った。

本児：12歳（来談時）小6。小柄、散髪嫌いではさばさの髪、風呂嫌いで不潔。ふてくされた表情をしているが、ときに緩むと可愛い。母親との衝突はあるが、他人に対する反抗的・攻撃的な態度はない。成績は常時下位、勉強は大嫌い。昼過ぎに起きてきて、明け方までTVゲームをする生活。いつも一人。小さいときから友達と遊ぶことを好まなかった。万引き等はなし。

兄：16歳。公立高校2年。小さいときから本児と相性が悪く、高校入学と同時に通いやすい祖母宅に。その間の交渉・決断は一人ですべて行った。母や祖母との関係は悪くない。成績良好。サッカー部で熱心に活動している。

父親：44歳、土木建設会社に勤務。幼少時より、言うことを聞かない本児を殴っていた。酒を飲んだときは、母親に対する暴力もあった。本児が小学校3年の頃、勝手に出て行ったきり戻らず、そのまま離婚。住居は分かっているが、連絡はとっていない。現在、生活保護受給。アルコール依存症。

父方親族：情報なし。

母方祖母：60歳。徒歩で20分くらいの所に借家住まい。パート就労、健康状態は良好。

夫（祖父）は3年前に死去。母親とは電話で話をする程度。兄は頻繁に出入りし、現在は居候。本児はあまり寄りつかない。

② 相談内容：「小6の長男が学校に行かず、夜通しネットでチャットやゲームをしている。また、昼夜を問わず自転車でフラフラ徘徊する。どうしたらいいか教えて欲しい」。

③ 初回面接：初回面接：母親と本児（小6）が来所。待合室では二人でしゃべっている。清潔感はないが非行親和性も感じさせない。入室後、相談員と目を合わさず落ち着かない。質問には無言。たまに首肯。時折、母親の説明に反発し言い返す。母も負けずと大声でやりあう。そうこうするうちに、本児はふてくされて退室。母は止めない。力は母が勝っている印象。

④経過：初回以後本児は来所せず、不規則な母親のみの来談となる（週一回の約束が月1回程度）。本児はもともとおとなしい子で、小1の頃から登校しぶりがあった。怠学傾向が顕著になったのは、小3の離婚の頃から。父親からは、尋ねられたことにはっきり返事をしないとよく殴られていた。止める母親にも手を上げていた（特に酔っているときなど）。兄はうまく立ち回り、父親に気に入られていた。

中学生になると、「早く食事をしなさい」「ゲームの音量を下げなさい」と注意すると興奮し、暴れてガラスを割ったりするようになる。足や肩を蹴られた母親が包丁を持って身を守り、近所の人がパトカーを呼んだことが何度かあった。警察官が来ると、本児はさっさと自分の部屋に引っ込んだ。母親は警察の介入を望まず、児童相談所の家庭訪問や一時保護も拒んだ。

中2になっても相変わらず昼夜逆転で、深夜までパソコンでゲーム・チャットをしている。一度、警察官がパトカーにのせて一時保護所に連れて行っただが、その日のうちに無断で帰宅。以来、警察も様子を見て帰るようになっている。

⑤Aさんの気がかりな点：母親の要望に応える支援ができない。子どもにニーズがない。このままの形で相談を受けていていいのだろうかと迷っている。本児のアセスメントもできておらず不安（現状は、検査も受診も難しい）。警察・学校・児相との連携がうまく機能していない。

「はい、ありがとうございました。よく整理されていたので、とてもわかりやすかったです。それでは、Aさんの力になれるように、みんなで考えていくことにしましょう。まずですね、面接の様子というか状況をロールプレイでやってみようと思います。クライアント、母親ですが、その役をしていただく方をAさんに指名してもらいます」

「(A) ええと、Bさんをお願いしていいですか？」

「(B) はい、やってみます」

「ありがとうございます。じゃあ、別室でBさんに最近の面接の様子を伝えてください。ロールプレイのイメージを共有できたらいいので、再現にこだわる必要はありません」

「打ち合わせの間に、みなさんにはお願いがあります。この後、ロールプレイを見て感想を言うわけですが、簡単なルールがあります。一点目はロールプレイの感想です。必ず、『～したのがよかった』『～しなかったのがよかった』という形で発表してください。二点目ですが、他の人の意見に対する感想は『そうそう、それに付け加えて～』という形でお願いします。

今日、Aさんだけでなくみなさんに知ってもらいたいのは、参加者の数だけ視点があり、考え方があり、可能性があるということです。正解がなんて気にしないでいいです、そんなものがあるのかどうかもわかりませんが。否定的なコメントや反対意見も要りません。では、よろしくお願いします。みなさんの発表はホワイトボードに書きます」

4. 養護教諭Aさんのロールプレイ

「(T役) 夏休みはどんな様子でしたか？」

「(M役) この間教えてもらったNPOの〇〇塾に誘って見たんです。お昼が出るからって。そしたら、

週に一回、月曜日の昼食の時間だけ行くようになりました。食べるだけ食べたら、さっさと帰ってくるんです。わけがわからない、あれで意味があるのでしょうか」

「(T役) 私は、家に閉じこもるよりずっと意味があると思います。こんなふうによくいと予想しておられたんですか？」

「(M役) いいえ、まさか昼食で釣れるなんて、思ってもみませんでした。ただ、あいさつも会話もいっさいなしです。食事だけなんて、恥ずかしくないんですかね」

「(T役) 家にずっといることに飽きたのかもしれないですね」

「(M役) そういえば、8月のはじめごろにフラッとおばあちゃんの所に行きました。わたしは大歓迎なんですが、母はたいへんだったみたいです」

「(T役) そこでも昼夜逆転に近い生活でしたか？」

「(M役) ゲームを持ち込んでましたから、たぶん」

「(T役) お年寄りだらだらした生活を好まないから衝突したのかもしれないですね」

「(M役) そうなんです。もともと口うるさい人ですし、兄ともめたみたいで、4、5日して戻ってきました」

「(T役) じゃあ、行くのも帰るのも自分で決めたということですね」

「(M役) まあ、そういうことになります」

「(T役) 帰ったとき、彼はなにか言っていましたか？」

「(M役) 別に。あいかわらず深夜までネットして、昼ごろ起きてくる生活です。注意したらパトカーが来るようなことになるし、言わないとずっとあのままでしょうし、このままでいいのでしょうか。何かできることはないですか？」

「(T役) お気持ちはよく分かりますけど、いまできることはなさっていると思います」

「(M役) そうでしょうか、しんどいです、一緒にいるだけで」

「(T役) あの、いまのままでいけないと思われるのは、特にどの部分ですか」

「(M役) すべてです。学校に行かず、昼間寝て、夜はネット、注意したら暴れるし」

「(T役) でも、最近はパトカーの回数がぐんと減っていますよね」

「(M役) だからといって、何も変わってないですよ」

「(T役) 夜間徘徊しても犯罪を犯すわけでもないし・・・」

「(M役) 先生、はっきり言って、あの子、おかしくないですか？」

「(T役) 別におかしいとは思いますが、それとは別に、いつか専門医の意見も聞いてみたいとは考えています。タイミングを見て考えましょう」

5. 感想

「ありがとうございました。拍手！お二人ともうまいですね」

「(A) Bさんが上手だから、雰囲気がよく出せたと思います」

「Bさん、どんな感想を持たれましたか？」

「(B) 最初は不安がいっぱいだったのですが、いま適切なことをしていると言い切ってくれたので、安

心しました」

「なるほど。では、みなさんの感想をうかがいます。さきほどの留意事項、『～したのがよかった』『～しなかったのがよかった』『そうそう、それに追加ですが～』を忘れないでくださいね」

「(C) Bさんも言ってましたが、いまやっていることが最適だと言われたのはよかったと思います。ウツがあるし、そこまで支えないと途切れてしまうような感じがします」

「(D) そのことの付け加えですが、“パトカーの回数が減ってる”と具体的にあげられたのは説得力があったと思います」

「(E) NPOの塾に連れて行ったこと、祖母宅に行ったことなどを肯定的にとらえているのがよかったと思います」

「(F) そうそう、祖母宅から帰ってきた決断をきちんと評価しているのがすごいと思いました」

「(G) ウツの母親を絶対に責めないという姿勢がよかったです。これまで子どもとバトルをしてパトカーが来たこともあったけど、母親失格なんかじゃないというメッセージが伝わってきました」

「(H) 診察や検査をすすめるタイミングが良かったと思います。突き放す感じがしませんでした」

「(I) “しんどいです、一緒にいるだけで”のあと、“いまのままでいけないと思われるのは、特にどの部分ですか”と具体的な話にもっていったのはスゴイと思いました。あそこで感情の話になったら、もっとしんどくなっていったかもしれません」

「(J) わたしも同じ感想を持ちました。一見、行き詰まっているように見えるけど、共感しながらいないに現状に意味や価値を認めていくと、収まりのいいところに落ち着いていくと、そんなふうに見えました。勉強になりました」

「ではAさん、みなさんの意見を聞いていかがですか？」

「(A) 母親の“これでいいのか、他にやらないといけないことがあるのではないか”という焦りは、わたしの気持ちそのものなんです。だから、みなさんに“それでいい”と言われて、すごく楽になりました」

「母親の気持ち、クライアントの気持ちを実感できた？」

「(A) その通りです。なにしろ切羽詰まった状況なので、共感するだけじゃなくてある程度は自分の考えを率直に伝えようと意識しました。でも、いざとなったら難しくて、受け止めるのがやっとだと思っていたのですが、いまはこれでよかったのだという気になっています。ほんとにありがとうございました（拍手）」

「はい。せっかくの盛り上がりですけど、ここでちょっと休憩を入れましょう。Aさん、Bさん、いったん役から抜けましょう。目を閉じて肩の力を抜いて深呼吸します。心の中でご自分の名前を呼んで返事してください。私が目を開けてと言うと、すっかり役から抜けます。はい、目を開けてください。ではみなさん、このあとさらなる高みをめざして進みたいと思います」（続く）

第12回

誌上ひとりワークショップ

シリーズ2

～その2 「自分の考えを率直に言いたい」ロールプレイ～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

6. 児童相談所心理判定員Cさんのロールプレイ

「Aさんにおたずねします。ほんとうはこんなやりとりをしたい、できるならこうしてみたい、みたいな思いがあって提出されたのではありませんか？」

「(A) はい、そのとおりです」

「その具体的なイメージみたいなのがあれば、話していただだけませんか。せっかくだから、みんなで考えたいと思うので」

「(A) わかりました。先ほどもちょっと言ったのですが、この方のように行き詰まっておられる人に対して率直に自分の考えを伝えられたらいいな、という思いが常にあるんです。もちろん共感的に話を聞き、可能な限りサポートします。でももう一步踏み込めないかと、そうしないと申し訳ないみたいな気持ちになるんです。だって、日々困っているのだから。もちろん、先ほどのBさんのように言ってもらえたら、そうか、あれはあれでよかったのかなと思うんですけど。でも、やっぱり自分のアイディみたいなものを伝えたいです」

「なるほど。自分の感じたことや具体策をもっと積極的に伝えたいということですね？似たような思いをお持ちの方、いらっしゃいますか？ほう、結構いるんだ」

「(A) 安心しました、心強いです」

「どうでしょうか、似たような相談での体験談をお持ちの方、あるいは自分だったらこんな意見を言う、こんな提案をする、こんなやりとりをめざす、等々アイディアがある方、おられますか？」

「(C) そんなたいそうなものではないのですが、ちょっと思いついたことが・・・」

「はい、お願いします」

「(C) 先ほど、ここでの約束事として『～したのがよかった』『～しなかったのがよかった』を言われました。それを実際に使ってみてとても感じがよかったので、それを面接でできないかと思ったのです。ちょっとやってみてもいいでしょうか？」

「それはすばらしい着想ですね。是非、お願いします。相手役は引き続き B さんをお願いしてもいいでしょうか？」

「(M役) あいかわらず深夜までネットして、昼ごろ起きてくる生活です。注意したらパトカーが来るようなことになるし、言わないとずっとあのままでしょうし、このままでいいのでしょうか。何かわたしにできることはありませんか？」

「(T役) 私、この仕事をしてずっとやってきてわかったことがあるんです。口幅ったい言い方で恐縮ですが、心配事がある場合、なにかをすることだけが解決策ではないと思うんです」

「(M役) え？それは、どういうことですか？」

「(T役) なにかをしない、という選択も同じくらい意味のあることではないでしょうか。もちろんそのためには、しないための努力と覚悟が必要ですが」

「(M役) なにかをしない？どういうことですか」

「(T役) なにかをしないというのは、なにもせずにサボるのとは全然意味が違います。やらないほうがいいことはやらない、というちゃんとした解決策です。お母さんの場合、“お子さんの背中を押すことをいまはしない”のは立派な解決努力だと思います」

「(M役) できないからしないのではなく、理由があってしないという意味ですか？」

「(T役) そう、まったくその通りです。たとえば、関心がないから、あるいはめんどうだから背中を押さない、だったとしたらどんどん悪くなったでしょう。でも、実際はさほど悪くはなっていませんよね」

「(M役) このところは、そうだと思います」

「(T役) それが立派な解決策をしているという証明ではないでしょうか」

「(M役) そうか、そういうことなんだ・・・」

「(T役) はい。闇雲にやれることをやるのは、報われないだけでなく悪くするがあります。それに対し、すべきでないことはしないのは堅実な選択肢です」

「(M役) なんかホッとした気持です。でもまた焦りだすかもしれません (笑)」

7. 意見と感想

(拍手)

「どうもありがとうございました。では、感想を聞いてみましょう。まず、大活躍の B さん」

「(B) とにかくびっくりしました。なにもできていないのではない、なにもしないという解決策を選択しているのだと言われて。目が点になって、そのあとなるほど腑に落ちたんです。現に悪くならないでしょと言われて。ちょっと鳥肌が立つくらいすごかったです」

「(C) さっきの面接と先生の話がヒントになっただけです」

「確かに、Bさんが楽になってるのが横から見ていてもわかりましたよ。じゃあ、みなさんの感想を伺います」

「(F) ただ認めるだけじゃなくて、“なぜなら～”と添えているのがよかったと思います。すごく説得力がありました」

「(H) Cさんがどっしり落ち着いているのがよかったです。それで説得力が増していると感じました」

「(D) 経験から学んだと言ってるのも、自然な感じがしてよかったと思います」

「(E) Bさんが腑に落ちたところで、大丈夫！みたいな励ましを付け加えないのがよかったです」

「(G) そうそう、やったという感じで調子に乗らなかったのがよかったです」

「(J) ロールプレイのことではないのですが、先生の話のすぐ面接に取り入れられるのがスゴイと感心しました」

「(I) 今のは見させてもらって、私もやってみたくになりました。いいでしょうか？」

「はい、大歓迎です。ちょっとその前に、やってみてどうでした？Cさん」

「(C) 本当は、大慌てでバタバタしていたのです。でもそうは見えないといわれて、そういう外見のことも重要なんだと学びました。“～がよかった”という感想はほんとに勇気づけられるものだの実感しています。とてもうれしいです。ありがとうございました」

「ではIさんに、相手役を指名してもらいますが、今度はBさんには傍から見てもらいましょう」

「(I) じゃあ、Jさん、お願いしていいですか」

8. スクールカウンセラーIさんのロールプレイ

「(M役) あいかわらず深夜までネットして、昼ごろ起きてくる生活です。注意したらパトカーが来るようなことになるし、言わないとずっとあのままでしょうし、このままでいいのでしょうか。何かできることはないですか？」

「(T役) なるほど。ちょっと教えて欲しいのですが、いま、いちばん子どもさんに望んでいることはなんですか？」

「(M役) 朝起きて夜寝る生活をして欲しいです」

「(T役) 学校に行く行かないよりも、まず？」

「(M役) そうです、とりあえず生活リズムをちゃんとして欲しいですね」

「(T役) なるほど。逆に、いちばんやってほしくないのは？」

「(M役) 乱暴なことです。パトカーが来るような騒ぎはして欲しくない」

「(T役) ゲーム三昧よりも？」

「(M役) だって、それはご近所に迷惑をかけませんから」

「(T役) 確かに、そうですね。となると、月曜にはお昼を食べに出かけるし、パトカーの回数も減っているし、ガラスは割れていないし、“やってほしくないことの減少”は実現しつつありますね」

「(M役) まあ、そう言えばそうだけど」

「(T役) うまくいきだした理由というか、以前と違うやり方があれば教えて欲しいのですが」

「(M役) うまくいってるかどうかは知りませんが、いちいち言うのがめんどろで、諦めかけているのが以前との違いです」

「(T役) というと？」

「(M役) 細かいことをチマチマ言うのに疲れたんです」

「(T役) なるほど、それくらいの距離で向き合うのがピッタリはまったのかもしれないね」

「(M役) どれくらいの距離ですか？」

「(T役) 細かいことをひとつひとつつかまえてやらない、という距離です」

「(M役) 大雑把でいいということですか？」

「(T役) はい、いい感じだと思います。親子の距離とかその間を流れる空気は、家庭によって、時期によって違って当然だと思うんです。お宅の場合、いまいいところにむけて変わりつつあるという感じがします。ゴールまでにはもう少し時間がかかるかもしれないけど、そちらに向いているという感じがありますね。そんな気がなさいませんか？」

「(M役) 距離とか空気とか、よくわかりませんが、最悪の頃に比べるとマシなのは事実です。ただ、我が家ではちょうどいいとしても、それじゃあ世間的には通用しないでしょう？」

「(T役) えっ、世間ですか・・・」

「(M役) たとえば、学校とか社会では通用しないでしょう？」

「(T役) 確かにまあ義務教育の場合は距離は近いし空気は濃いし、彼にはきついでしょね。ですが、社会はいろいろあるから。仕事で言うと、農林業や作家・研究職なんて距離は遠いし空気も薄いでしょう？ チームで動く仕事は真逆でしょね。つまり、社会に出る際に選べばいいってことだと思います、最適な職を」

「(M役) まさか、研究者になるとは思わないけど、新聞配達とか水道のメーターを見て回る仕事は向いてるかもしれませんね」

「(T役) でしょ？会社勤めだって、職種や規模によって全然違いますから。世間で通じるかどうか心配するより、自分にあう距離を知ること、それがいまいちばん大切なのではないのでしょうか」

「(M役) 確かに。あの子だって、今のまま大きくなるわけではありませんものね。学校が濃すぎて近すぎるというのは、実感として分かる気がします」

「(T役) この話は夫婦関係や近隣との関係にも言えるでしょうね (笑)」

9. 意見と感想

(拍手)

「ありがとうございます。まだまだ続きそうでしたが、Jさん、いかがでした？」

「(J) 楽しかったです。いつまでもやっていたい感じで。ちょっと前を見て生きようかなって感じがしてきました。夜明けが近づいてる、みたいな」

「そうですか、わたしも楽しい面接は大好きです。さて、みなさんの感想を聞いてみましょう」

「(B) いちばんしてほしいことを先に聞いておいてから、いちばんやめてほしいことを具体的に話して

もらって、既に実現できていると持って行くのはスゴイと思いました」

「(D) そうそう、私もそこに感心しました。はじめから作戦をたてていたのですか？」

「(I) 実は、さきほどのCさんの面接で“するのがいい”と“しないのがいい”の対比がおもしろくて、“してほしい”と“やめてほしい”を対比させてみようと思いました」

「みなさん、どんどん進化していきますね」

「(G) 空気の濃さという言葉が良かったです」

「(H) 私も、魅力的な言葉だと思いました」

「(A) 学校の友達関係とか勉強がどうこういうのではなく、その空気が濃過ぎるという説明は腑に落ちました。誰も責めないところが良かったです」

「(C) そうそう、人間関係ではなく空気と表現することで、愛情だとか信頼を持ち出さず、母親を責めたり慰めたりしなかったのが良かったです」

「(E) そのあたりの延長上に楽しい面接ができたのでしょうね。素敵だと思います」

「(F) 私も賛成です。こんな重い話題を、たとえつかの間であっても楽しく語り合えるなんてすごいことだと思います」

「はい、どうですかIさん？」

「(I) ありがとうございます。楽しむ余裕なんてぜんぜんなくて、もういっぱいいっぱいでした。特に、世間では通用しないでしょうって言われたときは頭が真っ白になりました。そしたら勝手に空気だとか距離だとかって口から出てきて、ちょっと不思議な体験でした。Jさんがお上手だから、うまくのせてもらったんだと思います」

「それって、面接の神様が降りてきた瞬間でしょう。ちょくちょくありますよね？ないですか？そうですか。いや、どうもありがとうございました。みなさんがたくさんのアイディア・意見・感想を出してくれたので、Aさんだけでなく、私も含めてここにいるみんなにとって刺激的で有意義な時間になりました。この後は、私の方からもいくつかアイディアを出して見ようと思います。それをもとにして、引き続きこの事例をみんなで考えましょう。では20分間の休憩を取ります」

第13回

誌上ひとりワークショップ

シリーズ2

～その3 家族との交流パターンを変える～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

10. 目に見えるところで考える

「Aさんが出してくれ事例にタイトルをつけるとしたら、どんなものが浮かびますか？ 思いつきで結構です、どんどん言ってみてください」

「(参加者)不登校・怠学の親子関係、昼夜逆転した思春期との家族関係、要保護家庭の母親支援、虐待の影響を抱える母子家庭支援」

「はい、ありがとうございます。こういったケースでは、キーワードとしてまず親子関係・家族関係が思い浮かびますよね。一般的に〇〇関係と〇〇支援をいれておけば、まずハズさない。ただ逆に薄まってしまって、そこからは関係調整みたいな抽象的なアイデアしか浮かばず、結果として腹を割って向き合うとか、腹を据えて待つみたいなレベルで収まってしまいます。家族にしてみれば、おなかのことばかり言われてもね。

学会の演題みたいなのは避けて、具体的に目に見える表現をしてみましょうか。野暮ったいのがいいです、どうですか？」

「(C)しゃべるとトラブルになる母子」

「(F)まともに話ができない親と子」

「(I)煩わしいけど離れられない家族」

「そうそう、それです。いいですね。どうコミュニケーションすればいいのか戸惑っている姿が目に見えます。Fさん、子どもはなんで口をきかないんでしょう？」

「(F)母親から、昔は愚痴、いまは注意ばかり聞かされてきたものだから、子どもはうんざりしているのだと思い

ます」

「そうね、たしかにそういうヒストリーを持っていますよね。じゃあ、母親はどうすればいいでしょうか、Cさん」

「(C) 愚痴と注意を言わないと決める、しかないかなあ・・・」

「なるほど、Iさんは？」

「(I) 子どもは何を言っても無駄だと思い込んでいる、と思います」

「はい。子どもは言い返しても無駄だから黙っている。けど、母親は懲りずに言ってくる、となると？」

「(I) 手が出るでしょう」

「ですよ、暴れます。けど、いくら暴れても言いたいことは伝わらない。だから、いつそう苛立ちます。その態度が母のさらなる怒りを引き出すでしょう。で、母は利子をつけて怒りを返す。そもそもの原因をつくった夫への怒りも、そっくりため込んでるから」

「(I) 自分の両親への怒りも混じってると思います」

「そうでしたね、学校への怒りだって上乘せしてるかもしれません。それをまとめて向けられた子どもは、“なんでやあ〜”で、太刀打ちできるように暴力のレベルをあげる。そのあたりでパトカーが来ます」

「(I) それで、双方とも我に返るのでしょうか」

「そう、撤収！の合図になっていたかもしれませんね。飲み屋街のケンカと同じですね。誰かが止めに入ると拳を下ろせます。だとしたら、お母さんに何を言ってあげられるだろう？いまの話のスジを大事にしながら、みんなで話し合ってください」

11. 迷宮の入り口

「どうですか？」

「(H) 先ほどCさんが言われたように愚痴と注意を言わないと決めるのがいちばんだけど、そんなことはできない状況だから、怒りが出やすい場面を避けるしかないのではないか、という話をしました」

「ほう、それはどういう場面ですか？」

「(J) 昼頃、のそっと起きてくる場面です」

「(A) それから、ゲームの夢中になっている場面です」

「(B) 夜に徘徊して帰って来る場面は、寝ているので衝突しないですんでいる、という話をしました」

「それがヒントになったわけですね。問題の場面をひとつくりにしたらどうなりますか？」

「(B) だらしない姿？」

「(F) 怒りをかき立てられる場面」

「(I) 迷惑な状況」

「そう、そうです。見てしまったら叱らざるを得ない場面です。ですが、深夜の帰宅だけは例外になりやすい。どうしてか、眠っていて見ないから。見さえしなければ腹も立たない。つまり、夜更かし、昼起き、パソコンゲーム三昧、だらったとした態度、深夜徘徊、腹の立つ言葉遣い等々、ホットスポットに出くわした瞬間に吸い込まれ、怒りの迷宮をさまようことになります。じゃあ、どうしましょう？」

「(A)ホットスポットですか？それを避けて通ればいいけど、それじゃあ・・・」

「それじゃあ、どうなります？」

「(A)良くなりませんでしょう、でも、怒ってもよくなりませんね」

「そうそう、むしろこじれます。ホットスポット＝迷宮の入り口ですから、近寄らなければ少なくとも悪くはならないです」

「(D)確かにそうですね。でも、それだけでは母親は不満でしょう、きっと」

「その通りです。避けるだけではよくならないとの不安は拭いがたいでしょうね。それじゃあ、うちら親子はすれ違うだけ？となります」

「(E)善いところを見つけてほめてあげなさい、と言ってもそんなのはないし」

「お母さんの立場からはそうでしょうね」

「(A)たしかに、昼夜逆転して、学校を休んでフラフラして、手伝いはせず、自分勝手な生活をして文句ばかり言ってるんですから、いいところなんて陰に隠れてしまっています」

「(G)でも探したら、きっとあるはずです。善いところがない子はいません」

「ちょっと待ってください。この子の生活には善いと悪いしかなくて、すべてそのどちらかですか？皆さんの一日だって同じです。善いと悪いだけで分けられますか？」

「(F) えっ、どっちつかずですか？」

「そう、どっちでもないってのがあってしょ」

「(H) あいまいってことですか？」

「普通です。たとえば、震災復興支援でボランティアをしている人は一日が善いことばかりで埋まっているのでしょうか？違いますよね、普通の時間があるはずです。普通に食事して普通に休息をとって、普通にトイレに行くでしょう。普通に着替えて、普通に風呂に入って、普通におしゃべりをするでしょう」

「(A) そういう意味ですか、でも、普通はたくさんあっても話題にするのは難しくないですか？」

「そうでしょうか？みなさん、休憩時間の楽しいおしゃべりを思い出してください。自分の善いところが話題でしたか？不満で盛り上がった部分もあったかもしれないけど、大部分は取るに足らないと言ったら失礼だけど、普通の話じゃなかったですか？フェイスブックだって、ご存じですよ、まあ99%は普通のネタですよ。まさに取るに足らないネタです、だからなんだって話、でも途切れることなく続きます。普通のたわいない話だから書き込みが絶えない。普通の話だから、顔を知らない人にも絡めるのです」

「(A) なるほど、言われてみれば、そのとおりです」

「でしょ？迷宮の入り口を避けた後で、コミュニケーション・スキルを伝授します。伝授は大げさですけど、コミュニケーションって増やせばいいもんじゃないという大原則。増やすコミュニケーションと減らすコミュニケーションがあるのだと」

「(E) 難しいですね。心理面接に詳しくないと理解できないかも」

「大丈夫、慣れです。じゃあ図に描きますね」

12. 交流パターンの整理

「みんなで、この家族の特徴的な交流パターンを書いてみましょう(できあがったのが図1)」

「はい、では次は対応策です。伝授の箇条書きがkろえです((図2))」

「頭が混乱しそうですか？じゃあ休憩をとりましょうか。その間に頭の中を整理しておいてください。このあと、これを取り入れてロールプレイをやります。しっかり普通の話をしてください」。(次号に続く)

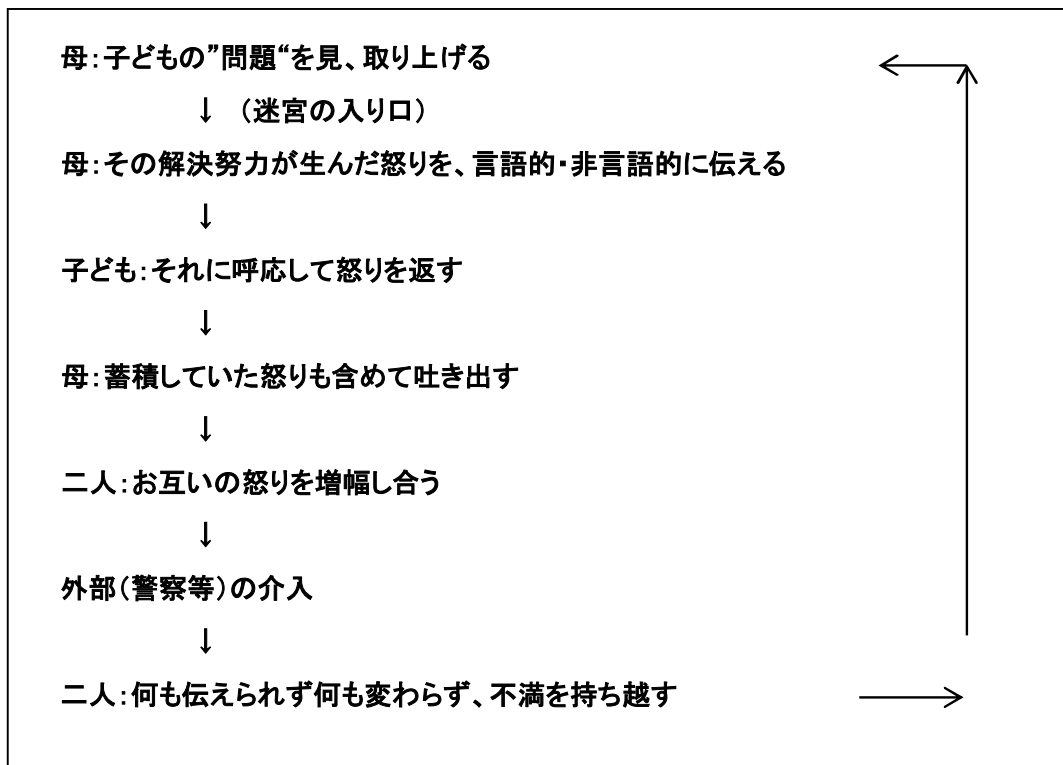


図1 この家族の交流パターン

- 対策
- 1)迷宮の入り口＝問題の場面を見ない
 - 2)問題中心のやりとりを減らす
 - 3)代わりに、“なんでもない普通”に注目し、そこでのやりとりを増やす

図2 交流パターンの変化のために

第14回

誌上ひとりワークショップ

シリーズ2

～その4 家族の交流パターンを変える～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター

13. 交流パターンを変えるロールプレイ（迷宮の入り口を中心に）

「では対策の説明をしますね。そのあとで、図2を念頭においてロールプレイをやっていただきます。

迷宮の入り口からコミュニケーションが始まると悪循環に一直線となるので、その対策は問題の場面を見ないようにすること。人間、見ないと腹は立たない。知らぬが仏に近い感じかな。つまり、見ないことで問題を取り上げてのやりとりを減らしていく。へんな言い方だけど、問題がある限り対話は途絶えません。クドクド、ガミガミ対ウルサイ！という定番やりとりができますから。ある意味、対話が問題を持続させる一因でもある。じゃあどうする？そこを見ない代わりに、日常のなんでもないフツーに注目します。ほら、ただの野草38と思って見向きもしなかったものが、実はローズマリーだかレモングラッセだ呼ばれたら、どうですか、注目しませんか、話題にするでしょ。せっせと水やりだってします。まあ、そんな感じです。スルーしていたフツーをウォッチと言いたかったのですが、かえってわかりにくくなりましたか。さてAさん、どうです、再度やってみます？」

「(A) はい、やってみたいです。Bさん、またお願いできますか？」

「(B) わたしもやりたい」

「じゃあお願いします。ホワイトボードは、よく見えるところに置いておきます。それから、途中で混乱したり行き詰まったりしたら、ストップをかけて、メンバーのみなさんにアドバイスを求めてください。みんなで考えましょう」

「(T役) 最近はどんな様子ですか？」

「(M役) 夜遅くまでネットにつないで、ゲームをしています。昼頃起きてくるのも、学校に行かずにゴロゴロしているのも、相変わらずです」

「(T役) そうですか。なるほど。お母さんとしてはストレスがたまるでしょうね。どうやって、発散しておられるのですか？」

「(M役) 発散なんかできません、たまる一方ですよ」

「(T役) たとえば、長男さんと話をするとか、そういうときはいかがです？」

「(M役) おばあちゃんの所にいますから、めったに話すことはありません。たまに電話してくると、お金のことですから。クラブの合宿費がどうか」

「(T役) なるほど、長男といってもまだ自分のことでいっぱいなんでしょうね」

「(M役) そんな感じです」

「(T役) そのストレスですが、どういうときに貯まりますか？」

「(M役) どういうときって、さっきいったように夜中までネットしているからうるさくて」

「(T役) 夜中に部屋まで見に行かれるわけですね？」

「(M役) 眠れないときは、そうしますね」

「(T役) はい、それで？」

「(M役) 言い争いになりますけど、こっちは早く寝たいので引き下がります。それで余計にイライラして目がさえてきて、朝まで寝られないですよ。あっちは朝までやるから、どうせ同じでしょうけど」

「(T役) それじゃあ、無駄骨？」

「(M役) そう、余計にストレスですよ」

「(T役) さっき、眠れない夜っておっしゃいましたが、そうじゃない夜は？」

「(M役) 寝てしまったら気になりませんよ、眠ってるんだから」

「(T役) お薬飲んで？」

「(M役) そう、飲んでも眠れない夜はね、ホント、辛いですよ」

「(T役) ああ、こんなふうに言えないでしょうか。つまり、夜中に注意しても効果はゼロでどっちみちネットは止めない、注意するだけ余計にイライラして損だと」

「(M役) もちろん、それはわかっています。でもイライラしてきたらね、言わなきゃ気が済まないし・・・」

「(A) ちょっとストップしていいですか？Bさん、すみません。ええと、自分では“見ない”を助言したつもりなんですけど、Bさんの腑に落ちている様子が全くなくて」

「Bさん、そうなんですか？」

「(B) 諦めろって言われてる気がして、ちょっとイラッとしたかなあ」

「(F) 傍で見ている分には、意図ははっきり伝わってきました。あえて言うなら、注意しても変わらないことより、注意しない方のメリットを強調したらどうでしょうか？」

「(G) ストレスから入ったのは自然でよかったですけど」

「(E) 注意する夜と寝てしまう夜を並列で話したのは、とてもよかったと思います」

「(J) 私もそう思います。同じように並べる話し方で、昼起きとか夜間徘徊の場面に広げていったら、“見ない”の提案の意図が徐々に伝わっていくように思います」

「そうですね、ここまでいい感じですよ、Aさん。新しい工夫は、基本的に今までのやり方に変えて、となります。いままでの努力を否定される予感がした家族が、不安と警戒、期待と緊張を抱くのは自然なことです。ですからBさんの反応は当然なんです。援助者も一緒になって不安になるとお互いの不安が増幅しあうから、Jさんのアドバイスに従って前に進みましょう」

「(A) ありがとうございます。やってみます」

「(T役) あ、夜間に帰宅する時がありましたよね。その場合はどうなんですか？やっぱりストレスがたまりますか？」

「(M役) 補導されたりしないかと心配はしますが、静かだからよく眠れるんです。その間に帰ってくる人が多いので、それほどストレスではないかな」

「(T役) これだって、帰るのを待って注意しても効果はないでしょうし、むしろ先に眠ってる方がお互いにストレスにならないわけですね。実際、補導されたことはないしね」

「(M役) そうです」

「(T役) 問題の場面に出くわさないってことはお母さんの健康にとって、とても重要な要素ですね。じゃあ、昼過ぎに起きてくる頃合いを見計らって買い物にでかけるのはどうでしょうか？お子さんはお母さんが帰った頃には部屋に戻ってる。ことさら不機嫌になる理由もないし」

「(M役) 確かに・・・」

「(T役) クリニックの医師だって、ストレスはできるだけ減らすように言うでしょ？」

「(M役) その通りです」

「(T役) どうでしょう、できるだけ腹立たしい場面には遭遇しない、その方向でやってみませんか？具体的には、忘れずに眠剤を飲んでさっさと眠る、昼に起きてくる頃には買い物に出かける、夜帰って来る前に寝てしまう。もし子どもさんがこれみよがしになにかやらかしても、乗せられずにペースを守るのです」

「(M役) でも、それだとスレ違い親子になってしまいませんか？将来のことなどを話すチャンスがなくなってしまうのか、心配なんですけど」

「(T役) それはストレスとは別のことですね。その点についてもちゃんと考えてますから」

(拍手)

「はい、ありがとうございました。お二人とも慣れてきましたね。では、感想を聞いてみましょう。Aさん」

「(A) はじめの頃はオロオロした感じがありましたが、途中でみなさんに助言してもらってからは時間がたつのが早かったです」

「(B) 正直、インターバルの直前はイライラしてました。でも、後半になって理解できるとスッキリし

ました。いまは、早く実行してみたいという気持です」

「いや、それはすごいですね。どなたか？」

「(D) 昼起きてくる頃を見計らって買い物に行くというアイデアが良かったです。よく面接中に思いついたものだと感心しました」

「(J) さきほど、並べる話し方で昼起きとか夜間帰宅とかほかの“問題”場面に広げていったらと気軽にいったのですが、それを見事にやってのけたのがすごかったです。驚きました」

「(I) 一貫して、できそうにないことは求めなかったのが良かったです。お母さんはウツがあるし」

「(C) 楽しい面接をしようとしているのが、とても良かったです。それだけでも、来てよかったと思われるでしょう」

「(F) そうそう、私も部屋が明るくなった感じがしました」

「(H) 実行可能と思えるような具体案がちりばめられているのが良かったです」

「みなさんが感じておられたことは、私も実感しました。お母さんが“できるかも”と希望の灯を照らしたからでしょうか。では休憩を挟んで、いよいよ最後のロールプレイです。みなさんの呼吸が合ってきて、このまま終わりに近づくのがもったいない気がします。合宿でもしましょうか？冗談ですけど」

「(A) ほんとですね、合宿したいです」

「(C) 私も賛成です」

「みなさんうなずいてらっしゃるから、とりあえず自発的なネットワークでつながってみたら。合宿とか勉強会の企画は、そのなかでゆっくり検討されたらいいかもしれません。とりあえず、休憩しましょう」

第 15 回

誌上ひとりワークショップ

シリーズ2

～その5 家族との交流パターンを変える～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

14. 交流パターンを変えるロールプレイ（“普通”を中心に）

「こういった“変える面接”は、どうしても提案型になります。提案は、一步間違うと押しつけがましさがにじみ出ます。ですから、これまで以上に受容や共感を大切にしてくださいね。では、対策の二番目、増やすコミュニケーションを念頭においてロールプレイをやりましょう。途中でストップをかけてもいいですから。どなたか？」

「(F) やります。Gさんがお母さんをやってくださるので」

「では、お願いします」

「(T役) 最近は、どんなことにお困りですか？」

「(M役) あいかわらずのダラダラ生活で、こっちはイライラしっぱなしです」

「(T役) なるほど。にもかかわらずパトカーが来る回数が減っているのは、どういうことでしょうか？」

「(M役) 深く接しないようになったからかもしれません」

「(T役) サラッと接しているってことですか？」

「(M役) 諦めですかね、それで衝突は減りました。でも、生活は全く変わってません」

「(T役) 衝突も減ったのなら、それはそれでいいことだと思います」

「(M役) ダラダラ生活が急に変わることはないのはよくわかっていますし、大きな衝突がないこともうれしいです。ただ・・・。スレ違い親子というか、言葉を交わす機会が減っていることが・・・」

「(T役) 本気でぶつかっていた頃が懐かしい？」

「(M役) ええ、正直いって」

「(T役) なるほど。お二人のストレスを減らすという意味で、サラッとした関係をつくったのはいいことだったと思います。その一方で、もう少しコミュニケーションを増やしていきたいというお気持ちもよく分かります。」

「(M役) 無理なことなのかもしれませんが」

「(T役) 今までのコミュニケーションのネタ、どんなことが話題でしたか？」

「(M役) はい。ほとんどは私が注意すると子どもが反発する、というやりとりでした。ほめたほうがいいくらいはわかってます。できるならそうしたいけど、そんなのないですから」

「(T役) いいところを見つけてほめようなんてことじゃなくて、普通のことをやってるときに一声かけるんです。難しいですか？」

「(M役) 普通ってなんです？ トイレにいくとか (笑)」

「(T役) そうそう、ご飯を食べる、着替える、パソコンの前以外でボーとしている、等々です。つまり、困りごと以外の行為全般です。そのタイミングで声をかけるとしたら、どう言いますか？たとえば、トイレに行こうとしていたら」

「(M役) 無理ですよ、そのタイミングで声をかけたことなんかないし」

「(T役) “トイレに花をかざってあったのに気付いた？ あれ、隣のおばちゃんにもらったの” でしょうか？」

「(M役) はっはっはっ、上品でびっくりすると思いますよ」

「(T役) それです、ねらいは」

「(M役) はっ？ 驚かすってことですか？」

「(T役) きっと小言だろうと身構えていたら、まさかのタイミングでまさかの上品な声かけ、それで怒りがわくことはあり得ないでしょ」

「(M役) トイレには花も花瓶ありませんけど、驚ろかすのはおもしろいですね」

「(T役) ついでに、食事中、おやつでもいいですよ、どうです？」

「(M役) おやつだったら、“どう、それカルビーの新製品だけど”」

「(T役) 最高です！ 食事なら？」

「(M役) そうですね、思いっきり自慢してみませんか」

「(T役) お母さん、センスがいいです。お子さんは目が点ですよ」

「(M役) 確かにこれだと、しゃべるたびにストレスが増すってことはないでしょうね。ただ、それでこの子がちゃんとした生活を始めるんですか？」

「(T役) いいえ、ねらいはそこではありません。顔を合わせるたびにお互いがストレスをためる生活、まずそこを抜け出そうと。そうになると、腹いせや当てつけみたいにエネルギーが無駄に使われることがなくなり、前に進むために使用されるでしょう。これから育ち盛りという年頃ですから」

(拍手)

「はい、ありがとうございました。おもしろかった、ほんとに。こんなふうに展開していくと、面接が楽しくって仕方が無いでしょうね」

「(F) おっしゃるとおりです。途中から楽しかったです」

「(G) 私もです。息子を驚かすなんて」

「みなさんの感想を聞いてみましょう」

「(J) 私も同じです、とにかく無理がないのがとてもよかったです。理想の面接はその日が楽しみになることですね」

「(C) どうしたらいいでしょうと聞かれたとき、“お母さんは答えを求めておられるんですね”とか、“それをいまから一緒に考え生きましょう” みたいな予想通りの返答をしなかったのがよかったです」

「(E) にもかかわらずパトカーの回数が減っているのはどうしてでしょう？の質問、“深く接しない”を“サラッとした関係”への言い換え、受け答え場がとてもよかったです」

「(H) コミュニケーションのネタみたいな言葉のチョイスがよかったです。全体の雰囲気明るくしていると感じました」

「(I) そうそう、“パソコンの前以外でボーとしてるとき”もそうです。一歩間違えたら失礼な単語が、母親との距離を縮めていると感じました」

「(E) 普通の場合面という提案を少し揶揄する感じでトイレを持ち出されたのに対し、さらっと“トイレに花をかざってあったのが付いた？あれ、隣のおばちゃんにもらったの”と返したでしょ。あれで完全にまいりましたって感じになりました。どうしてあんなこと、思いつくのですか？」

「(A) そうそう、そのノリだから、“どう、それカルビーの新製品だけど”がでたわけですよ」

「(B) さっきのHさんに追加ですが、“まさかのタイミングにまさかの上品さ。絶対に怒りは帰ってこないでしょ？”も言葉がいいですね。センスですかね」

「どうです？Fさん」

「(F) ほんとにうれしいです。そんなふうに見てくださって。この場の雰囲気のにせられた結果だと思います。また同じことをって言われても無理です」

「(G) 私もです。面接が楽しかったのは、ここの雰囲気に乗せられたからだと思います」

「この雰囲気では、もうおしまいって言えないですね。もうひとつやってみましょうか、いかがです？」

「(全員、拍手)」

「最後の最後は、解決志向的なものをやってみましょう。どなたか？」

「(D) 解決志向って言葉は知ってますけど、ハイってできるものじゃないから・・・」

「だから、的なものです」

「(D) 的なものならできるかな。Eさん、お母さんをお願いしてもいいですか？」

「(E) はい」

「では、どうぞ」

第16回

誌上ひとりワークショップ

シリーズ2 最終回

～その5 家族との交流パターンを変える～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

15. 交流パターンを変えるロールプレイ（“違い”を中心に）

「(T役) 最近は、どんなことにお困りですか？」

「(M役) あいかわらです。お昼に起きてきて、腹減った。夜は夜で、ネットばかり。もう、いちいち注意するのは止めました。無駄ですから」

「(T役) なるほど、それで正面衝突が減っているんですね」

「(M役) まあ、減ってると言えばそのとおりですが・・・」

「(T役) そもそも言ってなんとかなるわけではないですね」

「(M役) その通りです、無駄です」

「(T役) どうやって、そんなふうに気持ちを切り替えることができたのですか？」

「(M役) 気持ちの切り替え?? ということですか？」

「(T役) いちいち言うのをやめてみよう」と

「(M役) ああ、諦めですかね」

「(T役) 説き伏せることを諦めた結果、衝突が減ったわけですね。なるほど。で、お母さんご自身になにか変化はありましたか？体調とか」

「(M役) 確かに、体調はいいです。イライラして甘いものを口にするのが減ったせいか、もしれませんが」

「(T役) すごい、身体が若返ったんだ。気持ちの方はいかがですか」

「(M役) ウツ傾向はあまり変わりません。息子を諦めたからって、どうこうなる病気ではないですから」

「(T役) はい。ストップしていいですか？すみません。違いをうまく見つけられないのですが、助けて

もらっていいですか？」

「みなさん、どうですか？」

「(B) 気持ちを切り替えられたと、違いを指摘しておられますが」

「(セラピスト役D) ええ、でも、お母さんは諦めただけだと」

「(母親役E) 正直、切り替えたと言われてもピンときませんでした」

「(I) 諦め方とか、うまく違いを見つけられないのでしょうか？」

「(G) 生活面の違いとか、どうでしょうか？」

「そうですね、情緒的な部分での違いもいいけど、かなり主観的ですから、どうしてもあいまいになります。Gさんがおっしゃったような生活面など、具体的で客観的に確かめられるという利点がありますね。どうですか？」

「(D) ありがとうございます。続けてみます」

「(T役) ちょっと間違っていたら失礼なことになるかもしれませんが、今日、お母さんの雰囲気はこれまでと異なっている気がしたものですから、それで体調のこととかお聞きしたんです。ほら、洋服の色彩とか」

「(M役) そうですか、実は、久々にアウトレット・モールに行くことがあって、思い切って買ったんです」

「(T役) あのテーマパークの跡地にできた？私、まだ、行ったことがないんですよ。どんなところですか？」

「(M役) 思ったより大きくて、けっこう賑わってました。子どもが喜ぶアミューズメントもあって、ゆっくりできましたよ」

「(T役) えっ？お子さんも一緒に行かれたんですか？」

「(M役) ええ、軽く誘ったらついてきて。私も意外だったんです」

「(T役)ほんとですね。どんな誘い方だったんですか？」

「(M役) アウトレットに行くけど、どうするって。あの子も、気晴らしがしたかったんですかね」

「(T役) 向こうでは別行動ですか？」

「(M役) ええ、3時間くらいいたのですが、ずっと別々でした」

「(T役) そういう距離感、いいですねえ。いかにも思春期の親子です」

「(M役) そうなんですか？向こうでちょっとお小遣いを渡して、あとは自由にさせたんですけど」

「(T役) そういうことが洋服のチョイスにも出てるのかもしれませんがね。で、息子さんはなにか感想みたいなことを言ってましたか？」

「(T役) 帰りの電車も離れて座ってたから、あまり話はしていません。そうですね、確かに不機嫌な様子ではなかったです」

「(T役) そうですか。電車でもいい距離をとってらしたんですね。どうやってその距離感をつかまれたんですか？」

「(M役) ていうか、息子が勝手に・・・」

「(T役) それはそうでしょうけど、そもそもアウトレットの誘いに乗ってきたのはその距離を外でも保てそうという感触があったからじゃないでしょうか？」

「(M役) なるほど・・・」

「(T役) お互いのストレスが減る距離を得たきっかけを知りたいですね」

「(M役) あのを、子どものストレスも減ってるんですか」

「(T役) もちろんです。だって不機嫌じゃなかったでしょ。きっと、無駄に使うエネルギーがないぶん、身体にも心にもいいと思います」

「(M役) 距離感ですかあ、なんだろう、言われるまで意識しなかったから」

「(T役) じゃあ、距離を少し意識してお子さんと接してみてもらえませんか？ヒントがつかめるかもしれないから」

(拍手)

「やってみて、いかがでしたか？」

「(セラピスト役D) 具体的なところで違いを探そうといわれてずいぶん楽になりました」

「(母親役E) そうなんです。楽になったとたん、アウトレットを話題にする気になりました。不思議なものですね」

「おっしゃるとおりです、実際の面接でも全く同じだと思いますよ。みなさんはどうですか？」

「(A) 女性の関心事である服装から入ったのはよかったと思います」

「(I) いかにもアウトレットに興味津々って感じがお母さんの話をひきだしたみたいで、よかったです」

「(F) そこから劇的に話が展開しましたものね」

「(J) 距離をとるきっかけの問いがピンときていないのを察知するとすぐ次の課題に切り替えたのがよかったです」

「はい、些細な出来事でも意味を添えると大きな変化に見えてくる、そこがほんとによくわかりましたね。それと、家族に起きている違いを見逃さずにいると、母親も子どもに対し同じような視点を持つ、この相互作用がとても大事だと思います」

6. おわりに

「さて、今日は長時間にわたり熱心に参加していただき、ほんとにありがとうございました。いいロールプレイがいい感想を引き出し、それがさらにいいロールプレイを生む、とてもすばらしい相互作用でした。

じゃあロールプレイから抜けましょうね。目を閉じて肩の力を抜いて深呼吸します。心の中でご自分の名前を3回呼んで返事してください。私が目を開けてと言うと、すっかり役から抜けます。はい、目を開けてください。

ほどよい疲れと達成感に、実際にはこうはいかないだろうなという疑念が混じっている方もいるか

もしれません。でもね、本番で同じようなやりとりができるかなんてたいしたことではありません。いちばん持って帰って欲しいのは、視点も援助の入り口もたくさんあるということ、そして、いい時間を共有することが変化していく上でとても大事な要素になるということです。その意味で、今日は全員がとてもいい流れを共有していました。大きな成果だと思います。

成果と言えば、もう一つ。ここに集まった10人の人はしっかりつながりましたね。一日かけてロールプレイをやり、意見を交換しました。このつながり、ローカル・ネットワークも大きな財産になります。大事にしてください。

本日は長時間にわたっておつきあいいただき、ありがとうございました。もし、この日から始まった変化について聞かせてもらえる日が来れば望外の喜びです。お気をつけてお帰りください、さようなら」

